

あつて——女の姿を一番さきに見つけたのは、陸尺や巡禮などの休  
みたがる構えの大きい割に、燻ぶつた、軒には菱形の煙草の看板が  
つるされ、一枚立てさられた腰高障子には大きな蠟燭の繪がある茶  
店の中に將基を差して居た閑人共であります。

「彼れかよ／＼」

「彼れだ／＼」

碁將基を打つ閑人以上の閑人は、それを見物して居る奴であります。  
岡眼をして居た閑人以上の閑人が、今ふと藥屋の路次に入つて行つ  
た女の姿を認めた時は、一局の勝負がついた時であつたから、こん  
な場合には鬚の刷毛先の曲つたのまでが問題になる。

「噂には聞いたが、御姿を拜んだのは今日が初めてだ、成程」

「惜しいものだね——」

藍玉屋の息子で、金藏といふ不良少年は、縮まりのない口元から、  
惜しいものだね——と、ね——に餘音を持たせて、女の入つて行つ  
たあとを飽かすに見て居たが、

「全く、あのまゝ此の山の中に埋めて置くは惜しいものでございま  
すなあ」

■抜けて大きな眼鏡をかけた材木屋の隠居も、何うやら残り惜しい  
顔をして居る。

「全く罪ですな、凡そ世の中にあの位罪なものはござんせんな」  
一寸覗きに來たつもりで、浮々と立見をしてしまつた隣の宿屋の番

頭もつり込まれて慷慨の體

「左様、全く罪な事でござるよ、あんなのは一層助けない方がよう  
ござるな、添うに添はれず、生きるに生きられず、現世で叶はぬ戀



を未来で遂げやうといふのじや、それを一方を殺し一方を助けるな  
んと冥利に盡きたわけさ」  
眼鏡の隠居は慨歎する。

「でもね——女に廢りものはないからねえ」

藍玉屋の息子の眠むさうな聲が一座を笑はせる。

こゝに問題となつた女は、机龍之助が鈴鹿峠の麓、伊勢國關の宿で  
遭ひ、それから近江の國大津へ来て、龍之助の隣の室で心中の相談  
を定め、その夜の中に琵琶湖へ身を投げて死んだ筈のお豊——即ち  
お濱に似た女であります。

一人は死に、一人は残る。さうして今女は親戚に當る此の三輪の町  
の藥屋（藥屋といつても賣藥屋ではない旅籠屋である）源太郎の家  
へ預けられて居る。

二

助けて慈悲にならぬのは心中の片割れであります。

一方を無事に死なして置いて、一方を助けて生かして置くのは蛇の  
生殺しより、もつと酷い事である。

不幸にして、お豊はあれから息を吹き返した、眞三郎は永久に歸ら  
ない、死んだ眞三郎は本望を遂げたが、生きたお豊は、その魂の  
置き場を失うた。

これを以て見れば、大津の宿で、机龍之助が、生命を粗末にする男  
女の者に、蔭ながら冷ややかな引導を渡して、  
「死にたい奴は勝手に死ね」



と空嘯いた居たのが大きな道理になる。

息を吹き返して、伯父に當る此の三輪の町の薬屋源太郎の許へ預けられた後のお豊はほんとうに日蔭の花です。

誰が何といふとなく、お豊の身の上の噂は廣くもあらぬ三輪の町一ぱいに擴がつた。

お豊は離座敷に籠つたまま、滅多に出て歩かないのに、月に三度はお神へ參詣します。今日は參詣の當日で彼の閑人共に姿を見咎められて、口の端に上つたのもそれが爲でありました。

妙齡の女は、どこへ隠れても人の眼と耳を引き寄せ、お豊が來て二三日経たないうちに、夜なく薬屋の裏手の竹垣には大きな穴が幾つも明いた。こゝへ來てから、もう七十五日は過ぎたのに、お豊の噂だけは容易になくなりません。

彼の藍玉屋の金藏の如きは、執心の第一で、何かの時に愁えを帯びたお豊の姿を一眼見て、それ以來、無性に上りつめてしまつたものです。

事にかこつけては、薬屋へ行つて、夫婦の御機嫌をとり、折があらば、女と親しく口を利いて見たい、いろ／＼に浮身をやつして居るので、今他の連中は、また一局に夢中になる頃にも、金藏のみは女の消え去つた路次口を、じつと見つめたまま、立つて居ます。

時は夏五月、日盛りは過ぎたが、葎籬の陰で、地はそんなに焼けても居なかつたのに打水が充分に沁みて、お山から吹き下ろす神風が懐に入る時は春先とも思ふほどの心地がします。

「少々物を訪ねたうござるが……」

一方は將基に夢中で、一方は路次口に有頂天である。



「植田丹後守殿の御陣屋は……」

「ナニ、植田様の御陣屋」

金藏は、やつと店先に立つて物をたづねて居る旅の人に眼をうつした。この暑いのにまだ袴を着て居る。手には竹の杖。女を見て總立ちになつた閑人共は一人として見向きもしない。問ひかけられた當の金藏すらも、直に眼を反らして

「植田様は、これを眞ッ直ぐに左」

鼻であしらう。

旅人は、教へられた通りに、すつくと歩いて行く、これはこれ、昨夜を長谷の籠堂で明かした筈の机龍之助でありました。

三

長谷から三輪へ来たのでは後房りになる。

關東へ歸るつもりならば、長谷の町の半に「けはい坂」といふのがあつて、それを登ると宇陀郡萩原の宿へ出る、それが伊勢路へかゝつて東海道へ出る道であるから、當然それを取らねばならぬ。

龍之助が、この三輪まで逆戻りをして来たからには、關東へ歸る心を抛つたのであらう。また京都へ歸る氣になつたのかも知れぬ。

や、さうでもない、彼は今や西へも東へも行き詰まつて居る。

立往生をする代りに、籠り堂へ坐り込んで一夜を明かした、が、

八煩惱を拂うといふなる泊瀬の寺の夜もすがらの鐘の音も、龍之助が盡せぬ業障の闇に届かなかつた。迷ひを以て籠堂に入り、迷ひを持つて籠堂を出た龍之助は、長谷の町に来て、ふと善いことを聞いた。



これから程遠からぬ三輪の町に植田丹後守といふ社家がある——武術を好んで殊の外旅の人を愛する、そこへ行つてごらんさいと、長谷の町の町はづれで、井戸の水を無心しながら、このあたりに武術家はないかと、それとなく龍之助が尋ねた時に煙草を刻んで居た百姓が教へてくれた。

龍之助は、兎も角もその植田丹後守なる三輪大明神の社家を訪ねて見る氣になつて、こゝまでやつて来たものです。

教へられた通りに來て見ると、これは思つたより宏大な構えである。小さな大名、少くとも三千石以上の暮らし向きに見える、龍之助は入り兼ねて聊か躊躇した。

といふのは、自分のこの姿が、今更に氣恥かしくなつたからです。このなりで玄關へかゝつた處で、誰が武術修業者として受取つてく

れるものか、極めて情深い人で、いくらかの草鞋錢を持たして體よく追拂うが關の山、まかり間違へば、浮浪人として突き出される。一旦龍之助は通り過して若宮の方へ行き、また引返したが、別に妙案とてあるべき筈がない

「頼む——」

思ひきつて、そのまゝ玄關から音なう。

「ぞーれ」

十八九の青年が現れて來て、龍之助を見る、その物ごしが武術家仕込みらしく、龍之助の風采に多少怪しみの色はあつても侮りの氣色が乏しいから

「御主人は、御在宅か、拙者は仔細あつて姓名はこゝに申し難けれど、京都をのがれて、旅に悩む者、御高名をお慕ひ申して……」



「心得てござる、暫時これにお控へ下さい」  
 青年の呑み込みぶりは頼もしい、龍之助は、しばらく待つて居ると  
 青年は再び現れて、

「いざ、お通り下され、只今洗足を差上げるでござりませう」  
 案ずるより産むが安い、さすがの龍之助もその心置きなき主人の氣  
 質が忍ばれて、この時ばかりは涙のこぼれるほど嬉しかつた。

## 四

植田丹後守には子といふものがない、ことし五十幾つの老夫婦の外  
 に郡山の親戚から養子を一人迎へて、あとは男女十餘人の召使ひの  
 みで賑かなやうな寂しい暮しをして居ります。

子といふものを持たぬ丹後守は、客を愛すること一通りでない、い  
 かなる客であつても、訪ねて来る者に一宿一飯を断つたことがな  
 い——それ等の客と會つて話をするといふよりは、その話を聞くこ  
 とが樂みなのである。

客の口から國々の風土人情、一藝一能の話に耳を傾けて、時々會心  
 の笑を洩らす丹後守の面には、聖人のやうな貴さを見ることもあり  
 ます。けれども、たゞ客を延いては話を聞くだけで、丹後守自身に  
 は何もこれと自慢めいた話はない。

人の言ふ所には、丹後守は、弓馬刀槍の武藝に精通し、和渡内外の  
 書物を読みつくし、その上、近頃は阿蘭陀の學問を調べて居ると、  
 成程、丹後守は幼少から此の邸を離れた事がなく、ほとんど終日、  
 書齋に籠り勝で、祖先以來傳へられた和漢の書物と、自分が買ひ入



れた書物とは、藏にも室にも山をなして居るのであるから、一口に五冊を讀むとしても、假に五十年を見積もれば十萬冊は讀んで居る勘定になります。

武藝に至つては、どうも怪しい、家には先祖から道場があつて、これも幼少の頃から、寶藏院の槍、柳生流の太刀筋を殊に精出して學んだとは云うが、誰も丹後守と試合をした者もなし、表立つて手腕を表はした機會もないから、事實どの位出来るやを知つて居るものはないのです。

たゞ一度、何處かの藩の權者が、この三輪明神の境内へ逸り切つた馬を乗入れやうとした時に、通り合せた丹後守が其の轡づらを取り馬の首を逆に廻した事がある——馬士の武士は怒つて、鞭を振り上げて丹後守を打たうとした時に、何のはすみか眞逆さまに鞍壺から

轉げ落ちて、馬は棹立になつた。

何氣なき體で其のまゝ行き過ぎる丹後守の後姿を見て、落馬の武士も、附添の者も、これを追ひかける勢がなかつた、それを町の者が見て舌を捲いた事がある、それ以來、「御陣屋の大先生」の武藝を疑ふものがなくなつた。

机龍之助は、この人にはじめて會つて見ると、父なる彈正の面影を偲ばずには居られなかつた、何となく威光のある、さうして懐しい人柄だと荒びきつた龍之助の心にも情の露が宿る

「これは仕合せな事じゃ、どうか暫らく此の道場を預かつて戴きたい」

丹後守は、道場へ出て龍之助の試合ぶりを見て斯う云ふた——この道場には別段誰といつて師範者はないけれど、丹後守の邸には、石



一六  
使の外に、いつも五人十人の食客が居る、多くは浪人者で、その外、  
國々や近在から、武藝修業者が、絶えず集まつて参ります。

五

見も知らぬ浮浪人を、心よく家に通すさへあるに、その技倆を信じ  
て、己が道場を任せて疑はぬ丹後守の度量には机龍之助ほどの僻け  
た男も、そゞろ有難涙に暮れるのであります。龍之助は、再びこゝ  
で竹刀をとつて人を教へる身となります、何から云ふても、よく元  
の身の上に似て居る、丹後の守を父として見る時に、龍之助には更  
に強く、親の慈悲といふものがわかつて來るのであります。いか  
に物事に不自由がなくても、子のない人には、消して消せない寂し

さがありません。

われ一人を子に持つて、三年越の病の床から、勘當を言ひ渡さねば  
ならなかつた父彈正の胸の中は、どんなであつたらう——一轍の頑  
固な父とのみ見て居た自分の眼は若かつた、この頃では龍之助も東  
に向いて、別に改まつて手を合はすやうな事はせぬけれど、ひそか  
に襟を正して、父の上安かれと祈ることも度々であります。  
彼は、このしほらしき心根から、自と丹後守に仕へる心も振舞  
妙になる——もどく龍之助は卑しく教育された身ではない、何處  
かには人に捨てられぬ處が残つて居るのであらう、丹後守夫婦は龍  
之助を愛して何くれと世話をします。こゝへ來てから三日目の夕、  
龍之助は三輪明神の境内を散歩して、うか／＼と彼の藥屋源太郎の  
裏道の方へ出てしまひました。



竹の垣根があつて、かなりと廣い庭の植込から、泉水のひゞきなども洩れて聞えます、庭の方は大きな構えで、燈火が盛んにかゞやいて、客や女中の聲がやかましいのに、この裏庭は、垣根一重を境にして、一間ほどの田圃道につゞいては、威勢よく今年の稲が夕風に戦ひで、その間に鳴く蛙が、人足を聞いては、はた〜と小川に飛び込む位の静かさです。

龍之助は、この田圃道を通つて見ると、その垣根の處に黒い人影がある——夏の夕ぐれはよく百姓達が田の水を切つたり、または漁具を伏せて置いて鰻や鱒などを捕るのであるから、大方そんなものだらうと思ふと、その人影は、垣根の隙から庭の中を一心に覗いて居たが、どう思つたか、人丈けほどの垣根を乗り越えて、たしかに中へ忍び入らうとします、然も穩かでない事は、餘り目立たない色の

手拭か風呂敷を首に捲いて面をつゝんで居る事でありませう。

龍之助は、近よつて何の難作もなく、今中へ飛び込まうとする足でグツと持つて引ばると、他愛もなく下へ落ちる。

落つこちた男は

「この野郎」

いきなりに龍之助に武者振りついて來たのを、龍之助は無難作にとつて、田の中へ投げつけた。

投げつけられても、稲の茂つた水田の中ですから別に大した怪我はなく、暫らくもぐ〜とやつて、泥だらけになつて起き返ると、

「覚えてやがれ」

田の中を逃げて行きます。

小盗人！



もとより齒牙にかくるに足らず、龍之助は邸へ歸つた時分には、そんな事は人にも話さなかつた位ですから道で忘れてしまつたものと見えます、けれども、これから忘れられぬ恨みを懐いたのは投げられた方の人であります。

泥塗れになつて、自分の家の井戸側へ駆せつけたのは、彼の藍玉屋の金藏で、ハツ／＼と息をつきながら、

「口惜しい！ 覚えてやがれ、御陣屋の浪人者！」

吊り上げては無性に頭から水を浴びて泥を洗ひ落して、

「金藏ではないか、何ださぶ／＼と水を被つて」

親爺が不審がるのを返事もせず居間へ飛び込んで

「早く着替を出せ、寝巻でよいわ、エ、床を展べろ、早く」

散々に下女を叱り飛ばして、寢床へもぐつて寢込んでしまひました

この藍玉屋は相當の資産家であるから、その一人息子である金藏がまさか盗みをする爲に、人の垣根を攀ぢたわけでない事はわかつて居ます。龍之助の爲に蛙を叩きつけられたやうな目に會ひ、幸ひ泥田であつたとは云へ、手練の人に如法に投げられたのですから體の當りが手強い。痛みと、怒りと、口惜しさで、その夜中から金藏は齒齧みをなして唸り立てます。

「覚えてやがれ、この頃來た御陣屋の瘦浪人に違ひない」

金藏の親爺の金六と女房のお民とは非常な子煩悩でありました。

一人子の病み出したのを氣にして枕許につき／＼り、醫者よ樂よと騒いで居ましたが、今漸く寢靜まつた我が子の面を、三ツ兒の寢息でも窺うやうに覗きながら、



「ねえ、貴郎、今では、この子も自暴になつて居るのでございますよ」

「さうだ、さうに違ひない、それにしても、あの薬屋の奴は情を知らぬやつだ」

「ほんとに、さうでございますよ、あんな心中の片割れ者なんぞ、誰が見向きもするものか、この子が好いたらしいといふからこそ、人を頼んだり、直接にかけ合つたり、下手に出れば、好い氣になつて勿體をつけてさ、それが爲に此子が焦れ出して、こんな病氣になるのもほんとに無理がありませんよ」

「困つたものだ——」

子に甘い親二人は、わが子には少しも批難の言葉を出さず、何か、やつぱり人を怨んで居るやうである。

これは多愛もない事です。金藏はお豊を見染て、それを嫁に貰つて呉れねば生きては居ないと、親達に拗ねて見せる——さうして親を散々に骨を折らせたが、思ふやうに行かない、今夜も、そつと垣根を越えて、お豊の居る離れ座敷まで忍んで行かうとした處を、龍之助に引落されて投げられた。まことに、馬鹿げた話であるけれど、世に怖るべきは賢明な人の優良な計畫だけではない、執念の一つは賢愚不肖となく、こぢれると悪い業をします。

## 六

お豊は月の中、三度は三輪の神杉を拜みに行く。



三輪の大明神には、鳥居と樓門と拜殿だけあつて本社といふものがない、古典學者に云はせると、萬葉集には「神社」と書いて「モリ」と讀ませる、建築術の無かつた昔にも神道はあつた、樹を植ゑて神を祀つたのが即ち神社である——この故に三輪の神杉には神靈が宿る云々。

三諸山から吹いて來る朝風の涼しさに、勅使殿や切掛杉にたかつて居た鳩は、濡つばい羽ばたきの音をして、悠々と、日當りのよい拜殿の庭へ下りて來て、庭に遊んで居た鶏の群に交る。

「お早うございます」

豆を賣る婆さんは、もう店を出して、お豊の來たのに向うから挨拶をします。

「お早うございます」

お豊も返事をして、いつもの通り、豆を買つて、鳩に蒔いてやります。鳩が豆皿を持つたお豊の手首や、肩先に飛び上がつて、友達氣取に振舞うのも可愛らしい。鶏が遠くから居候ぶりに出て來て豆を拾ふ姿も罪がない。

お豊の面に、いさゝかの頬笑の影が浮ぶのであります。

拜殿の前から三輪の御山を拜む。

御山は春日の三笠山と同じやうな山一つ、樹木がこんもりとして、

朝の鬱氣が神々しく立ちこめて居ります。

若い女の人で三輪大明神を拜みに來る人は大抵歸りに、樓門の右の

脇の「門杉」に願をかけて行く。

三輪の七杉の中の「門杉」の故事は、こゝにいへば長い。

我庵は三輪の山も戀しくば



ともなひ來ませ杉立てる門

二六

の歌がそれです。

お豊は、この門杉には別に願をかける事もなく、樓門の石段を下りても、その方へは別に足を向けないで寶永三年、大風の爲にその一本を吹き折られた名ばかりの二本杉の方へ参ります。一人は死に一人は助かる運命が、丁度この二本杉のやうだと思はれるお豊には、三輪の七つの神杉のうち、この二本杉ばかりを拜みたい。一つには、この杉に願をかければ、一旦夫婦の契りを結んで一方の缺けた人々には、此上なき冥福があるといふ——彼の門杉は縁を結ぶの杉で、この二本杉は縁の切れた杉である。一は青春の子女に愛せられ、一は寡獨の人に慕はれる。吹き折られた杉の傷のあとには、まだ癒えない、そこから辛うじて吹

き出した芽生えを見て居るお豊の面には痛はしい色があります。

七

機龍之助も、ふと此の朝、植田の邸を出て、爽やかな夏の朝の襟氣を充分に吸ひながら、長者屋敷の方を廻つて、何の氣もなく此の二本杉のところまで來かゝつたのでありました。お豊は人の足音に氣がついて、人目を避けたい身の上ですから、隠れるやうに其處を立ち去らうとしたが、杉から右の方、二間ばかりの處に、凝と立ち止まつて、こちらを見て居た龍之助の面を、一目見たが我知らずまた見直すのでありました。

二人の面と面とが、まともに向き合はせられた時に、お豊は、

二七



「あの、あなた様は」

「何かに壓へられたやうに、斯ういつてしました」

「あ、關の宿でお見受け申した」

龍之助は、お豊の姿から、些つとも眼を放さずに、ずつと近寄つて來ます

「はい、あの節は難儀をお助け下さいまして」

「あゝ、さうであつたか、實は何處ぞでお見かけ申したやうじや、最前から、こゝで考へて居りました」

「存じませぬ事故、甚だ失禮致しました」

「いや、拙者こそ……」

龍之助は、いつもの通り感情の動かない顔色で

「併し和女様を此世でお見かけ申さうとは思はなかつた」

「え」

「あの若い、お伴れの方は如何しました」

お豊は露出に斯う言ひかけられて面が眞紅になります。わが隠し事を腸まで見透かされた狼狽から、俯向いてしまつて頓には言葉も出ない足も立ちすくんでしまつた様子であります。

「まことに、お恥しうございます、それではあなた様には何もかも」

「いや、何にも一向知りませぬが、和女様だけは此の世に無い人と思つて居りました」

「生きて生き甲斐のない身體でございます、お察し下さいませ」

お豊は、ハラ／＼と涙をこぼして言葉もつまつてしまつたのであります。

それを氣の毒と見たか、哀れと思つたか龍之助は、



「縁あらば詳しいお身の上を聞きもし語りもしませう、して和女様は今何處に居られます」

「はい、この土地の薬屋と申す旅籠屋が伯父に當りまして」

「はあ、薬屋……拙者はこの植田丹後守の邸に居ります」

そのまゝ、龍之助はサツサと樓門の方をさして通り過ぎてしまひました。

お豊は思ひがけぬ處で、思ひかけない人に會ひ、思ひがけない言葉を浴びせられて、しばらく何だか夢中になつてしまひました。

何といふ素氣ない人であらう！氣がついて見ると龍之助は、第二の石段をカタリ／＼と下駄の音をさせながら、身を真直にしてわき目もふらす祇殿の方へと下りて行きます。

## 八

關の宿で悪い駕籠屋に苦じめられたのを見兼ねて追ひ拂つてくれた旅の武士はあの人であつた。

あれだけの縁であると思つたらば、此處でめぐりあつたあの武士が何もかも一々自分の身の上を知つて居るやうである。

關の地蔵に近い宿屋に、眞三郎と一夜を泣き明かして、さて龜山の實家へは歸れず、京都へ行くつもりで、鈴鹿峠を越えて、大津の宿屋まで來ると、もう行き詰まつて二人は死ぬ氣になつた。

遺書を書いて、二人の身を、三井寺に近い、琵琶の湖の淵へ投げたが、倉屋敷の船夫に見出されて。――男を一人常久の關に送つて



自分だけ靈魂を呼び返される、今となつては、死ぬにも死ねず、この生きたぬけがらを、昔の人に遣はせる事が、餘りと云へば淺ましい、お豊は、しばらく立ち去り兼ねて涙を押えて居ましたが。

「お豊さん、お豊さん」

二本杉の後に聲がある。

「はい——」

お豊は驚いて涙をかくすと、藍玉屋の金藏が、いつ隠れて居たか杉の蔭から其處へ出て居ます。

「何か御用でございませうか」

「あの、お豊さん、この間わたしが上げた手紙を御覧なすつたか」

「いへえ」

「見ない、御覧なさない！」

金藏の容子が、何とも云へず氣味が悪いので

「あの、今日は急ぎますから」

「まあ、お待ちなさい」

金藏は、お豊の袖を抑えて

「その前の手紙は……」

「存じませぬ」

「その前のは……」

「どうぞ、お放下下さい」

「では、あれほど、わたしから上げた文をあなたは一度も御覧なさないか」

「はい、どうぞ御免下さい」

袂を振り切つて行かうとする時に、金藏の面が凄く険しくなつ



て居たのに、お豊はぞつとして聲を立てやうとした位でしたが、

「わたしは、日蔭者の身でございますから御冗戯を遊ばしてはいけませんぬ」

お豊は、丁寧に詫言をして放してもらはうとすると、金藏は蛇がからみつくやうに、

「お豊さん、お前は、今こゝに何をして居た、あの武士は御陣屋の居候じや、それとお前は、こゝで出會ふて不義をして居たな」

「まあ——何を」

「さうじやく、それに違ひない、お前は浪人者と不義をして居ると、わしはこれから觸れて歩く」

金藏はわざと大きな聲で呼び立てます。お豊は力一杯振りきつて逃げ出すと、追ひかけもしないで金藏は、

「覚えて居ろ」

伯父に當る藥屋源太郎は、お豊を自分の前へ呼び寄せて、

「お豊や」

「困つた事が出来たで、お前も承知だらう、あの藍玉屋の金藏といふ放蕩息子じや」

「はい」

金藏に弱らせられて居るのは、お豊ばかりではなく、伯父夫婦も、あの執念深い馬鹿息子には困り切つて居るのであります。

「この頃は丸で氣狂ひの沙汰じや、何でもひどく、わしを恨んでこ



の家へ火をつけるとか云ふて居るさうしや」

「まあ、火をつける——どうも伯父様、わたし故に重ね〜御心配をかけまして何とも申上げやうがござりませぬ」

「ナニ心配する事はない、多寡の知れた馬鹿息子の言ひ草じや、併し、あゝいふ奴が逆上ると、どういふ事を仕でかすまいものでもない、まあ要心に如くは無しと思ふて、わしは善い事を考へた」

「はい」

「それはな、しばらくお前をこの家から離して置くのじや、と云ふて滅多な處へは預けられないから、わしも色々考へた上に、とう〜考へ當たよ」

「伯父様、わたしは、もう此の上他所へ行きたうござりませぬ、わたしのやうなものは一そ、こゝで死んでしまつた方が、身の爲でござ

ざいます、伯父様のお爲でございます」

お豊が死にたいといふのは口先ばかりではないのです。

死ねば、親にも親戚にも、この上の恥と迷惑をかけねばならぬことを思へばこそ味氣なく生きながらへて居るので、本當に自分も死んだ方がよし、人の爲にもなるであらうと、いつでも覺悟は出來て居る位なのですが、伯父は、そんなには見て居ないので、

「いや、お前などは、まだ此れからが花じや、ナニ、お前の前だが若いうちの失敗は誰もある事じや、そのうちには自分も忘れ、世間も忘れる、その頃合を見計らつて、わしはお前をつれて龜山へ行き、詫び言をして目出度元へ納めるつもりだ、暫らくの辛抱だよ」

伯父は一人で力を入れて嬉しがつて居るやうでしたが、

「その、お前を暫らく預けて置かうと、わしが考へ當たのは、何の



手もないこと、ついこの先きのお陣屋じや、植田丹後守様とて受領  
 まである歴々の御社家、あの御主人は中々豪いお方で、奥様も親切  
 なお方、あのお邸へお願ひ申して置けば大盤石、それでわしは今、  
 御陣屋へお願ひに上がった處、御先生も奥様も早速御承知じや、御  
 陣屋の後ろ立て、丹後守様のお眼の光る處には、この界限で草木も  
 靡く、あんな馬鹿息子の指さしもなる事ではない」  
 お豊は、これを聞いて彼の二本杉で會つた机龍之助が、同じくその  
 植田丹後守の邸に居るといふことを思ひ出して、その面影がこゝに  
 浮んで來ました。

+

今宵は三輪大明神に「一夜酒の祭」といふのがあります。

丹後守の家では二三人の人が残つたきりで、あとは皆、晝からの引  
 つゞいての神樂と、今年は螢を集めて來て階段の下から放つといふ  
 催しを觀に行つてしまつて居ます。

その残つた中の男の一人は、机龍之助で、もう一人は久助といふ年  
 古く仕へた下男であります。龍之助は椽端へ出て、久助が先ほど焚  
 きつけてくれた蚊遣火の煙を見ながら、これも先刻久助が、持つて  
 來てくれた三輪の酒を。チビリ〜と飲んで居ました。

いつでも寝られるやうにと、久助は蚊帳の一端を吊りばなしにして  
 置いて、蒲團なども出して置きました。籠行燈の光がぼんやりとし  
 て居る處で龍之助は盃をあげながら、

「成程、この酒は飲める、處柄だけに味が上品である」



と獨りごとを言ひます。三輪の酒は人皇以前からの名物である、こゝにまた古典學者の云ふ所を聞く。

「ミワ」は、もと酒を盛る器の名であつた、太古、三輪の神靈は殊に酒を好んで、その醸造の秘術をこの土地の人に授けたといふ、また一説には「ミワ」は「水曲」である、初瀬川の水がこゝで迂廻する處から、この山にミワの山と名をつけた。それが社の名となり社を祭る酒の器の名となつた。土地の名になつたのは其の後である。彼の萬葉に謠はれし。

うま酒を三輪の祝のいはふ杉

てふりし罪か君にあひかたき

とある、また古事記に祭神の子が活玉依姫に通つたとある、甘美に

して古雅な味が古しから湛へられて居るといふことは三輪のうま酒の誇りであつた。

龍之助は、そんな考へで飲んで居るのではない、舌ざわりの、どろりとして、含んで居る中に、珠玉の溶けて行くやうな氣持ちを喜んで一酌二酌と傾けて居る——蚊遣火の烟が前栽から、横に靡き、縦に上るのを、ちつと見て居る容子は、何の事はない、蚊遣火を肴にして居るやうなものです。

「誰か湯に入つて居るな、お早どのかな」

湯殿で湯の音がする、廊下をすつと突き當ると、鍵の手に廻つた處に物置と脊中合せて湯殿がある、それは女達の入る湯殿である、いつも、こんな時には留守居役の老女中、お早婆さんが、居睡り半分、仕舞湯に漬つて居る筈である。



「ウム、太鼓の音がするな、里神樂の太鼓、子供の時には、あの音にドノ位心を躍らせた事であらう」

笛と太鼓の音は、すぐ前の竹藪にひゞいて遠音ながら手にとるやうです。龍之助は、それから沈吟して、盃をふくんで居ると、庭先を向うの椿の大樹の下から、白地の浴衣がけで、ちらと姿を見せたものがあります。

「婆さんか」

龍之助は見咎めて呼んで見ますと、

「いゝえ、わたくしでございます」

「あゝ、あのお豊どのか」

「はい」

お豊は、この家に預けられて居ます。龍之助は、その事を知つて居

た。お互に同じ家に来り合せた事を、その時から知つては居たが、今日で五日ほど人の手前を憚つて、まだ親しくは面も合せず口も利かずに居た。

「そなた様も、御留守居でござつたか、まあこゝへお掛なされ」

龍之助は、自分の持つて居た團扇で椽の一端を押へます。

「有難う存じます、こんな失禮な容装で……」

今湯の音を立て、居たのは、この女であつた、湯あがりに、一寸身じまひをして、寬いだ浴衣がけの姿に氣を置いて、少し落つかぬやうに、まだ椽へは腰を下ろさないで、團扇を片手で綾なしながら、ちよつと蚊遣火の方に眼をそむけた横顔を、龍之助はちらと見て、むらゝと過ぎにし戀の古傷に痛みを覚えるのでありましたが、すぐにはいつもの通り蒼白い色を行燈の光にそむけます。



「あなた様も、お留守居でございましたか、先日はどうも……」  
 「あれから、何となく、まだ話し残しがあるやうな、他に御用向がなければ……暫しそれへおかけなさい」

「はい、有難う存じます、こちら様へ上りましてから、まだ御挨拶も申上げませぬ、済みませぬと思ひましても、つい人目がありますので……」

お豊は、龍之助に向つて何か言つて見たいやうでもあるし、言ひ淀んで居るやうでもあります。

「實は拙者も……」  
 龍之助は取つてつけたやうに、斯う云つて、またお豊の横顔を見ながらしばらく黙つて居ましたが、

「拙者に兄弟はないが、どうやら死んだ家内にでも會うやうな、そ

なた様を見てから、そんな気分も致すのじや——これは餘り無様ながら、不思議なめぐり合が只事でないやうに思ふ」

「何かの御縁でございませう、あのあなた様にはそのうち關東の方へ、お立ちと聞きましたか、それはほとんどございませうか」

「うむ、拙者の身の上も……いろ／＼に變るので、どうやら此の頃では、この土地に居つきたい心地もする、當家の御主人が餘りに徳人で父に會うたやうに慕はしくも思はれるから、併し、そのうち立たねばなりません」

「定めし、お國では奥様やお子供様がお待ち兼ねでございませう」

「いや、拙者に女房はない、元はあつたが今はない、子供は一人ある——父親も一人」

カラ／＼と冴えた神樂太鼓の音が、この時、龍之助の臆に泌みて



團扇を取り上げた手がブル／＼としびれるやうに感じます。

どうかすると、世間には龍之助のやうな男を死ぬほど好く女があります——好かれる方も氣がつかず、好く方も何處がよいかわからな  
い中に、ふいと離れられないものになつてしまふ。

「女房はない、もとはあつたが今はない、子供は一人ある——父親も一人」

といつて俯向いた龍之助の姿を、お豊は何とも云へぬほどに物哀れに感じたのであります。さては此の人も自分と同じく、つれなき世上の波に揉まれ行く身であるよ。

「それはまあ、お可哀さうに、そのお子さんはさぞ會ひたくて居らつしやるでせうに」

「左様、年の行かない子供の身の上といふのは何處に居ても思ひや

られるでな」

「左様でございませうとも、せめてお母さんでもおありなさる事ならば幾らか御心配も薄うございませうが、お一人だけでは……」

「ナニ、親は無くとも子は育つといふから、まあ深くは心配せぬけれど道を歩いてても、その年位の子供を見かけると、ついどうも思ひ出されるハ、」

龍之助は淋しく笑ふ、

「ほんとに御心配でございませう、そのお子さんはお幾つ……男のお子さんでございませうか」

「數へ年で四つ、左様男の子じや」

「お母さんも定めて、草葉の蔭とやらで、お心残りでございませう御病氣でお亡くなりになつたのでございませうか」



「病氣ではない、自分の我儘から死んだのじゃ」

「我儘から……」

お豊は龍之助の荒切りにして投げ出すやうな返答で、取りつき場のないやうに、言ひかけた言葉を噤んで居ると、

「いや、そんな愚痴は聞いても話しても由ない事じゃ」

龍之助は、團扇をとつて其の墨繪をじつと見つめて居る。

曾て、島原の角屋で、お松が龍之助の傍に引きつけられて居る中にその身邊から、物すごい雲がむら／＼と湧き立つやうに見えて、ぞ

く／＼と居ても立つても居られないほど怖くなつた事があります。

今、幽霊も遊びに出やうとする夏の夕を背景に、蒼白い沈んだ面の

龍之助を、お豊がこちらから見る時に、この人の身の廻りには、や

はり何かついて廻つて居るものがある。

大氣が遽に蒸して來た、さつきから飲んで居た三輪のうま酒の酔が

この時に發したのか、龍之助は、ふいと面を上げると蒼白い面の眼

のふちだけは。ホンノリと櫻が浮いて居る。

「お豊どの、そなたは酒を上らぬか三輪の酒はよい酒じゃ」

「いゝえ、わたしはいけませんねが、お酌ならば……」

お豊は自ら怪しむほどに言葉が碎けて來た。

蒸して來た空氣の爲に、太鼓の音も泥をかき廻すやうで、龍之助も

お豊も何かの力で強く押されて居るやうです。

さうは云つたけれど、龍之助は再び酒杯を手に取らうとはせず。

お豊は、心持ち膝をこちらに向けるやうにして、二人は、やはり蒸

しあつた空氣に抑へられて、だまつて居ると、蚊遣火の煙は、その

間に立ち迷うて見えます



「お豊どの、そなたも遠からず伊勢へ歸られるさうな」

「どうなります事やら」

「さて、世間には、身の始末に困つた人が多い事じや」

龍之助は、この時少しく笑ふ、

「生きて居る間は故郷へは歸るまいと思ひます、歸られた義理ではありませぬ」

「成程……」

「伯父は遠からず連れて歸ると申しますけれど、わたしは歸らぬつもりでございます」

「して、永くこの地に留まるお考へか」

「いゝえ」

「では、何處へ」

「あの、私はいつそ、生きて居るならば江戸へ行つて暮らしたいと思ひます」

「江戸へ」

「はい、江戸には叔母に當る人もあるのでございますから、それを頼つて、あちらで暮らして見たいと思つて居ります」

「うむ、江戸で暮らす、それも亦思ひつきじや」

「それにつきまして、あなた様には……關東へお立ちの時に……」

お豊は、こゝまで來て言ひ淀んだやうでしたが思ひ切つた風情で、

「突然に、こんな事を申上げては定めし、鐵面しい奴ど、おさげすみでもござりませうが、あなた様が關東へお下りの節……出來ます事ならば」

「……………」



「あの、御一緒にお伴をさせて戴きたう存じます」

「一緒につれて行けと申されるか」

お豊を失望させるほど冷やかに龍之助は呑込んだともつかず、いやとも言ひ出さず、やがて、

「それも宜からう、強いてお止めは致さぬ」

やつと斯う云ひ出して、少し間を置き、

「が、そなたが江戸へ行くことは、伯父上は勿論の事、この先生

も、またそなたの御實家も皆不同意でござらうな」

「それはさうでございませうけれど……若し故郷へ送り返されるやう

な事になりますれば、生きては居られませぬ」

「ふむ」

龍之助は團扇を下に置いて腕を組んで見ましたが、よく生命を粗末

にしたがる女よと言はぬばかりの態度にも見えました。また極めて真剣に何か考へて居るやうにも見えます。さうして、しばらくつぶつて居た眼をバツと開いて、

「宜しい、生命がけの覚悟ならば……」

この時、表の方で人の足音がやかましい。祭りに行つて居た家の連中が歸つて来たものと思はれる。

十一

その翌朝の事、藍玉屋の金藏は朝飯も食はずフラリと自分の家を飛び出しました

「金さん、金藏さん」



長者屋敷の處で、横合から、火繩銃を擔いで犬をつれた獵師體の男が名を呼びかけたのを、氣がつかず通り過ぎやうとすると、獵師は近寄つて來て金藏の肩に後から手をかけ

「如何した、金藏さん」

「やあ、惣太さん」

「何だい、えらく悄氣てるな」

「あゝ、少し病氣だよ」

「大事にしなくちやいけねえよ」

「だから保養に、こゝらを歩いて居るのだ、どうも頭の具合が面白くないからね」

「それでは金藏さん、今日は一日俺と高圓山の方へ行かねえか、山を駆け廻ると氣の保養になるぜ」

「そんな元氣がある位なら、斯うしてぶら／＼しては居ないよ、あつまらない」

「困るな、では俺が近いうち猪の肉を切つて行くから一杯飲んで氣晴しをしやう」

「うん」

「まあ、大事にするがい」

この獵師は惣太といつて、岩坂といふ處に住み、兎、鹿、猿、狐などの獸を捕つては生業を立て、居る。殊に猪を追ひ出すのが上手で評判をどつて居る。女房もあつて子供も三人ほどあるのに、酒が好きで女房子を食ふや食はずに置いては、自分は獲物の賣上で酒を飲んで歸つてくる。金藏とは飲み友達で、金藏はよく此の男に奢つてやつたり、狐の皮なんぞを賣りつけられたりして居ました、今、



二三間行き過ぎた惣太は、何事をか思ひ出したやうに引返して来て

「金藏さん、金藏さん」

「何だえ」

「ホントに済まないがねえ」

「うん」

「二分ばかり貸して貰ひたい、高圓山へ追ひ込んだ猪が明日の朝までには物になるんだ、さうすれば直ぐだ、直ぐ返すから」

「又かい」

「ナニ、今度は確だよ、どうも金藏さん、女房子が干物になる騒ぎだからな」

「貸して上げてもらい、がね」

「さうして下さいよ、拜みまさあ、お前さんなんぞは何不自由のな

い一人息子だから、二分位は何でもあるまいが、こちどらの身にと  
ると其の二分が親子五人の命の種になるんだから」

「では、二分」

金藏は懐から、財布を取出して、二分の金をつまみ惣太の出した  
大きな掌に乗せてやります。

「有難え〜」

惣太は推し戴いて、また少し行くと今度はその後影を見て居た金藏  
が何か思ひ出したやうに、

「惣太さん——」

「何だい」

「お前鐵砲を持つてるね」

「獵師に鐵砲を持つてるねと念を押すのも可笑しなものだね、この



通り持つてるよ」

「その鐵砲といふ奴は、素人にも撃てるものかい」

「そりや、撃てねへといふ限りはねへが」

「ドノ位、稽古したら覘いがつくだい」

何を考へたものか金藏は、それから毎日のやうに岩坂の惣太が家へ鐵砲の稽古に出かけます。

惣太の鐵砲をかりては的を立て、しきりにやつて居るので、少しづつは物になります、今日は三發共的に當たので、得意になつて四發目に裏山の樵の枝にたかつて居た鴉に覘ひを定めて切つて放つと見事に失敗つて、鴉は墜々とも云はず枝を放れてしまつたから「駄目、々々」

惣太は傍から、ニヤリ／＼と笑ひ、

「かけ鳥は、まだ早い」

「それでも鴉ぐらゐ」

金藏は口惜しさうです。

「鴉ぐらゐがいけない、鴉はど打ちにくい鳥は無いのだ、鴉が打てたら、鐵砲も黒人だよ」

「さうかなあ、一體、鳥では何が打ち宜いのぢや」

「さうさ、お前さんの打ち宜いのはそこに居る」

「馬鹿にして居る、あれは鶏ぢやないか、雉子か山鳩あたりを一つやつて見たいな」

「雉子を一つやつて御覽なさい、二三日うちに山へ伴れて行つて上げます」



「雉子が打てれば占めたものだ、それから兎、狸、狐猪、熊——」  
 「さうなると、こちららが飯の食ひ上げだ、併しこの間會爾の山奥  
 では、猪と間違へて人を打つた奴があるさうだから、金さん、お前も  
 そんな事だらうから、わしの見ぬ處で煙硝いちりは御免だよ」  
 「猪と間違へて人を撃つのは勘平見たやうなものだが、惣太さん、  
 人を撃つのは餘つばど六かしいものかい」  
 「俺も永年、獵師をやつて居るが、まだ人間は撃つた事はねえから  
 其の返答は出來ね」

十二

夜も四ツに近い頃、三輪明神の境内には、も早涼みの人も少になつ

た時分、「おだまき杉」の下に、一つの黒い人影があります。  
 手に持つて居た小さい徳利を下に置いて、鑿のやうなもので、類に  
 杉の根方を突付いて居ました。  
 いゝ加減に突付いて見てから、その徳利を穴へ當がつて見て、また  
 突付き直します。杉の根方は、盤屈して或は蛇のやうに走り、或は  
 墓のやうな穴になつて居る、その間を程よく取り擴げて、徳利を納  
 める爲に他目もふらず突つて居ましたが、ふいと、また一つの物  
 影が、地藏堂の方から、ゆつくりと歩んで来て、この「おだまき杉」  
 近くまで、やつて來たのにも氣がつかないやうです。  
 このゆつくりと歩んで來たといふのは、誰であるか直にわかる、そ  
 れは寝る前に必ず一たびは、明神の境内をめぐつて歩く植田丹後守  
 であります。



丹後守は、今「おだまき杉」の近くへ来て、ふと、根方を突付いて居る忍びの人の影を見つけたので歩みを止めて、何者が何をするかを、しばらく闇の中から、立つて見て居ました。

丹後守の歩き方は、まことに静かで、草履をふんで歩く時は、歩く時も、止まる時も、さして變りのない程でしたから、根方の人は少しも氣が付きません。

しばらく見て居たが、つか／＼と丹後守は近寄つて、

「金藏ではないか」

「はい——」

物影は非常なる驚きで、パネのやうに飛び上つたのでしたが、わな／＼と慄えて逃げる氣力もないものゝやうに見えます。

「何をして居る」

丹後守は、押して穩かに問ふ、

「へえ……へえ」

「それは何じや」

人影の藍玉屋の金藏である事は申すまでもありません。

丹後守に指さされたのは金藏が、幾度も穴へ入れたり出したりして見た彼の徳利でありました。

「へえ……これは……」

「これへ出して見せろ」

「へえ、これでございますか……これは」

金藏は怖る／＼徳利を取つて、丹後守の前へ捧げます、丹後守は、手に取り上げて見ると徳利のやうに見えても徳利ではありません。長さ凡そ一尺位、酒ならば一升五合も入るべき黒塗り革製の「罈



「薬入れ」であります。

「金藏、これはお前のか」

「はい……………」

「お前は、鐵砲を持つて居るか」

「いえ……………人から借りました」

「借りた——飛び道具は危ないものだぞ、之れは拙者が預かる」

「へえ……………」

「もう、有るまいな、まだ此んなものが家にあるか」

「もう、有りませぬ」

「よし」

丹後守は「彈藥入れ」を取り上げて叱言も何も云はずに云つてしまします。

この附近では丹後守に會つては、

「左様でございます」

といふか、

「左様ではございませぬ」

といふか

二つの返事の外は、餘り物を云へない事になつて居ます。丹後守が少しも強壓を用ひるわけではないが、自然そんな具合になつて居ました。

あゝ、悪い人に悪い物を見つかつた。

さすがの金藏は、慄え上がつて、身を支へる事も出来ないで、松の幹へしがみついてしまひました。

金藏は獵師の惣太の手から、舊式の種子ヶ島を一挺手に入れて、そ



の彈藥は滅多な家へは置けないから、こゝへ隠しに来たものです。町人が鐵砲を持つことは禁制であります。これが表向きに現はれる時は、打首か追放か、我が身は恩か、一家中にまで……こんな處へ彈藥を隠しに来るほどの考へ無しでも、その罪科の容易ならぬことは辨へて居るものと見えます。

證據物件は押收されてしまつた——

「あゝ、首を斬られる！今夜にも俺は縛られて打ち首になるのだ！」  
金藏は恐怖極まつて地團太を踏んで見ました。

いつぞや、あの初瀬河原で盗人が斬られて曝された事がある、俺は面白半分に見て来たが、斬られたあとの首から、ドク／＼と血が湧き返るのを見てから當分飯がまづかつた、俺も明日はあんなになるのだ——あゝどうしやう／＼。

無智な者は、罪を犯す時まではそんなに大それた事と思はない。居て、犯した時に至つて初めて、その罪の大きかつたのに仰天する。金藏は、一圖に何をか怨み恨んで鐵砲を習ひ出したが、今が今、その企ての怖ろしさに我と慄えてしまつたものです。

「如何しやう／＼」

そこで、一人で踊り廻つて居るのでしたが、斯ういふ人間は、いゝ加減怖れてしまつと、あとは自暴になります。

「如何なるものか、お豊を隠したのは、あの丹後守だ、おれの鐵砲を知つて居るのも、あの丹後守だ、皆んなやつ／＼けちまへん、どの道おれの命は無いものだ」

金藏は横飛びに飛んで、自分の家へ馳歸りましたが、その晩の中に親爺の金を一風呂敷と、自分が秘藏の鐵砲を一挺持つて、何處とも



知れず逃げ出してしまひました。

翌朝になつて、金六夫婦の驚きは一方でない、近所組合の人も總出で騒いだが、結局金藏の行方は更にわかりません。

丹後守は彼の彈藥の事に就ては、何も云はず、ホツと胸を撫で下ろしたのは藥屋源太郎はじめ、お豊等でありましたが、あんな奴だから又何を仕出かすまいものでもない——安心したやうな、まだ心配が残つて居るやうな、それでも金藏が居なくなつたので一先づ胸を撫で下ろしました。

金藏が居なくなつて見れば、お豊が植田の邸に預けられる必要はなくなつた。

お豊が再び藥屋へ歸つた時には、暗い心に薄い光がさして居た。

龍之助は、物の五町とは離れぬ處へお豊が歸つた其の晩は、ごうも寝られない淋しさを感じた。

さて、お豊は藥屋へ歸つて、いくらも経たないうちに、伯父の源太郎に向つて、龜山へ歸りたいからと言ひ出しました。

今まで死んでも歸らぬと言ひ張つた故郷へ、今日は我から歸りたいと言ひ出した事を伯父は、思ひがけなく驚いた位でしたけれど、當人にその心の起つた事は非常な喜びで、

「それでは、わしが送つて行つて訖をしてやるわい」

大急ぎで旅立の用意をはじめました、これと殆ど時を同じうして机龍之助は、植田丹後守に色々高恩の禮を述べて、これも關東へ發足の日取を定めました。

出立の前の日、藥屋源太郎が丹後守へ挨拶に出て、



「あれも、御蔭を持ちまして、明日故郷へ送り返す事に致しましたから……」

一通りの暇乞の話を聞いた植田丹後守が、

「わしが所に居る吉田龍太郎殿と申される御仁が、これも近いうち關東へ立つ、次第によりて同行を願うて見たら——」

## 十三

式上郡から宇陀郡へ越ゆる處を西峠といふ。西峠の北は赤瀨の大和富士まで蓬々たる野原で、古歌に詠はれた「小野の榛原」はこゝであります。

西峠は一名を「墨坂」といふ。「墨坂」の名は古代史に著はる。「鳥立

たづぬる宇陀の御狩場」といふのは宇陀の松山からかけて榛原より西峠、山邊郡に至るあたりを云うたものらしい。

古への「禁野」、推古の朝に薬狩の處、そこを伊勢路へかゝつて東海道へ出る道と、長瀬越をして伊賀へ行く路とが貫いて通つて居ります。

日中は暑さを厭ひ、今朝の晴いうちに馬を仕立て、三輪を立つた薬屋源太郎とお豊とは少し先きに、龍之助は二人の馬から十間ほど離れて、これも矢張り馬で、この西峠を越したのでありました。小野の榛原には、青すゝきが多く、大きな松や樅が並木をなして生えて居ます。

仰いで見ると四方に山が重なつて、遠くして高きは眞白な雲をかぶり、近くして嶮しきは行手に立ちはだかつて、人を襲うものゝやう



に見られます。

峠の上には雲雀が舞ひ、木立の中では、鶯が、氣味の悪いほど長い息で鳴いて居る。そして木の下崩は露に重く、馬の草鞋はびつしよりと濡れる。

龍之助は、またも旅人の心になりました。

三輪で暮らした一月半は、再びは得らるまじき平和なものでありました。龍之助の生涯に人の情を染みくくと感じたのは恐らく前にも後にも此の時ばかりでありませう。

大和の國には神ながらの空氣が漂ふて居る、天に向うて立つ山には建國の氣象があり、地を潤はして流れる川には泰平の響きがある。龍之助は、西峠の上に立つた時は遙に三輪の里を顧みて、

「さらばよ」

と聲を呑むたのでありましたが、今さきに行く、お豊の馬上の姿を見るとき、そこに纏纏として、また人の香ひのときめくを感ずるのであります。

丁度西峠と榛原の間まで来た時に、向うから、たゞ一人、旅の者がこちらを向いて足早に歩いて來ます。

細い道でしたから、並木の方へよつて、源太郎とお豊の馬をも避けたりやうに、龍之助の馬も避けて、通りすがりに旅の人は、ふと笠の中から龍之助の面を見て、棒のやうに立つてしまひました。

この時、林の茂みと小土手の間に二人の獵師が、身を隠して、何か獲物を覘つてゐるやうな容子を誰も氣がつかせませんでした。この一



人は誰とも知れず、ギョツとするほど人相の悪い男で、他の一人は金藏であります。

人相の悪い方は、

「金藏、慄えてるな」

「ナニ、大丈夫だ」

大丈夫だと云つて見たが争はれぬ、金藏は五體がブル／＼と慄えて物を云ふと齒の根が合ません。

「度胸定めに、それ、彼方から旅人が来る、あいつを一つやつ／＼けて見ろ」

人相の悪いのが、ふと木の葉の繁みから街道の遠くを見ると、たゞ一人、この小野の榛原を東から歩み来る旅人があります。

「ドレ／＼」

「それ、覗ひを着けて見ろ」

「うむ」

金藏は鐵砲を取り直して、構へて見たが支へ切れないと見えて、小土手へ銃身を置いて、目當と巢口を真直に、向ふから来る旅人に向けて見ましたが、

「やあ、速い、速い、恐ろしく足の早い奴だよ」

成程、向ふから来る旅の人の足の速力は驚くべきものです。土手へ鐵砲を置いた時に彌次郎兵衛ほどに小さかつた姿が、巢口を向けた時は五月人形ほどになり、速い／＼と驚いた時は、もう、眼の前へ人間並の姿で現はれて居ます。

「丸で、飛んで来るやうだ、こりや天狗だ、魔物だ」

さすがの二人が呆氣にとられて居る中に、眼の前を過ぎ去つて、並



木の彼方へ見えなくなつてしまひます。

「驚いたなあ！足の早い奴もあればあるものだ」

人相の悪いのが苦笑ひをする

しばらく、無言で、二人は旅人が過ぎ去つた方の路を、やはり木の葉の繁みから一心に見つめて居たが、

「それ、来たぞ！」

「やあ、やあ」

金藏は聲と共に胸震ひをはじり出した。人相の悪いのは平氣なもので、

「いゝかい、金藏、よく度胸を落つけろ、それ前の奴が親爺で、後のが女だ、オヤ〜武士の見えぬのはオカしいぞ、兎に角、前の親爺をドンと一つ、いゝか、あとはおれが引受ける」

申すまでもなく、二人が覗く當の的先を通りかゝる前のは薬屋源太郎で後のはお豊であります。

机龍之助は、どうしたか、まだ姿を見せない、さうだ、さつき通りかゝつた、あの足の早い旅人で行き違ひになつて何か間違ひでも出来はしないか。

丸きり執念のない者と、どこまでも執念の深い者は、どちらも始末に困ります。

金藏の執念は、どう〜此處まで来てしまつた、慄えながら鐵砲の覗ひをつけて居る處を見れば可笑しくもあるが、面の色を眞蒼にして命がけの念力を現はして居る處を見れば、すさまじくもありません。「モット落着いて……馬の腹を覗へ馬の腹と人の太股を打ち貫く氣



組でまだくズツト近くへ来た時で宜い」

傍で力をつけて居る人相の悪い獵師は、最初に金藏に鐵砲を教へた惣太とは違ひます、惣太は飲んだくれであつたけれど、これほどの悪い度胸はない。

これは針ヶ別所といふ處に住んで居て、表面は獵師、内實は追劔を働いて居た「鍛冶倉」といふ綽名の悪黨であります。

金藏が、この鍛冶倉の乾分となつたのにも相當の筋道があるけれどそれは省く。

「お豊、いゝあんばいに、お天氣じや、今夜は内牧泊りとして、それまでに夕立でも出なければ何よりじや、お吉田様が見えない、どうなさつた」

藥屋源太郎は、あどをふり返つて囁くと、お豊は

「如何なさいましたでせう」

「馬の草鞋でも解けたのであらう、馬子さん、少し静かに歩かせてお呉れ」

馬を静かに歩かせて

「あの御武家は、エラク武藝がお出来なさるとお陣屋の先生が賞めて居ました」

「さうでございます、お陣屋へ修業者が参りまして手に立つ者は無かつたと、皆のお方も申して居りました」

「けれども、口を利きなさるのが、何だかサツパリし過ぎて、その癖、いつでも沈んで、何だか氣味の悪いやうな、選ましいやうな、妙に氣の置けるお方じや」



「それも、お家にお子供さんが居らつしやるし、奥様もお亡くなりなすつたさうですから、それや、これやの御心配からでござりませう」

「そんな事かも知れぬ、併し、まあ道中も、あのお方がお居でなさるので安心じや、時にあの馬鹿者の金藏……あゝいふ、執拗い奴もないものだが、あんなのが行くくは胡麻の蠅、追剣、盗人、そんな事に落ちるのだ、心がらとは云へ、氣の毒なものだ」  
お豊は何とも云はないで、また後をふり返つたが、龍之助の姿はまだ見えない。

ら「叱ッ——まだく」

林の茂みに覗いをつけて居た金藏は此の時赫としてあはや火蓋を切うとしたのを、あはて、傍に見てゐた鍛冶倉が押えたのは、時機まだ早しと見たのであらう。

この日の朝、三輪の里なる植田丹後守は、しきりに胸さわぎがします。

丹後守といふ人は、妙な人で時々前以て物を言ひ當る事があります。

「お前の家へ昨夜、子供が産まれはせぬか」

ある時、或家の前へ立つて斯ういふた時、その家の主人が眼を圓くして、

「大先生、まあ、どうして御存知でございます、まだ何處へも沙汰をしませんに」

「さうか、それは男の子であらうな」



「左様でございます、如何して、それがおわかりになりました」

「そんな夢を見た、何にせよ目出度事だ」

といつて立ち去つてしまつた事がある。

また、或時借金の爲に、財産を亡くしかけて、首を縊らうか、身を投げやうかと恩案しながら道を歩いて居る町の人に出遭はした事がある。

「奎右衛門、お前は何を心配して居る」

「へえ……」

「お前の後には死神がついて居るぞ」

「え……」

男は、慄え上がつて後をふり向くと、丹後守は笑ひながら、

「もう少し前へ出ると金神が待つて居る」

丹後守は此の男の爲に借金と死神とを拂つてやつた事があります。

こんな事は丹後守にあつては珍らしい事ではなく、雨が降る事、風の吹く事、火事のある事なども前以て、よく言ひ當たものです。

龍之助一行を送り出して置いて、しきりに胸さわぎがしたので、讀みかけた本をふせて、丹後守は座右の筮竹と算木とを取つて易を文て、見ました。さうして

「内山殿、内山殿」

二聲ばかり呼んで見ました。

「はい」

いつぞや、龍之助を玄關に迎へた處の青年でありました

「あのな、甚だ御苦勞だが、貴所と、それからモ一人、高江氏を煩はしたらばと思ふが、ちよと近い所まで行つてもらひたいのじや」



「承知致しました、何れへ」

「初瀬の町から西峠の方へ、急いでもらひたい、馬で飛ばして見てもらひたいのだが」

「心得ました、して御用向は」

「どうも、最前送り出した、あの吉田氏と薬屋の者、あれがどうも気が、りじや、たしかまだ西峠へかゝるまい、せめて、あの原を越えるまで、御兩所でお見送りが願ひたい」

「心得ました」

「いや、まだ、お待ち下さい」

丹後守は、急いで立たうとする青年を再び呼びとめて

「少々お待ちなさい、貴殿は鐵砲が打てましたな」

「はい、少しは」

「どうか、これを持参して下さい」

丹後守は戸棚の中から桐の箱を取り出して、打ちかけた紐をとくと手に取り上げたのは一挺の拳銃であります。

この時分、拳銃は餘り見た事がないのであります。然も、今丹後守が取り上げた拳銃は、全く、類の見えなかつた洋式のものであります。内山は、先生が妙なものを持つて居ると、怪訝な面に、その拳銃を見つめます。内山が不思議がるのも、その道理で、これは「引落し式」と名づけられた前装の六連發であります。これと同じ品が嘉永六年ベルリ來朝の時、武器奉行の細倉謙左衛門に贈られた事がある、鐵砲がはじめて日本へ來たのは、天文十二年（或はその以前）といふ事であるが、拳銃が日本へ來たのは、この時が、その最初でありました。



今、丹後守が取り出したのは正にそれと同じ型のものがあります。どうして丹後守が、そんなものを何時の間に手に入れたか、それさへ不思議でありましたが、丹後守といふ人は、春日の太古を調べる傍には阿蘭陀の本を読み、今易筮を終つて次に舶來の拳銃を取り出すといふ人であります。

それで、右の拳銃を右手に取り上げて眼先へ伸ばし、

「内山殿、その簾を捲き上げて戴きたい」

「心得ました」

簾を上げると庭である。

「あの植木鉢を一つ打て見ませう」

花壇の隅に伏せられた素焼きの植木鉢に硯ひをつけたのでありましたが轟然たる響きと共に鉢は粉に砕けます

「いざ、これを持ってお出で下さい。」

内山は、呆氣にとられながら、丹後守の渡す拳銃を受け取つて見ると、筒先きは六辨に開いて、蓮の實のやうに六つの穴があります

「その一發は今撃つてしまひました、あと五發續けざまに撃てるやうになつてゐる」

「はあ」

内山は、それを調べて二三度構へて見まじたが

「然らば——」

と云つて立つと、

「あの、まだ奥に文四郎流の火繩があります、高江殿にはあれを持つてお出でなさるやうに」

「心得ました」



何にしても大業な事である、わずか二三の人を送るに駿馬に乗り、飛び道具を用意するとは丸で合戦に向ふ沙汰である。

彼の足の早い早い旅人は、西峠を越えて来る机龍之助の馬を避けて通す途端に馬上の人を見上げたのであります。

龍之助も、ふいと笠越に見下ろすと

「や」

旅の人は、覺えず足を踏みしめたやうでしたが、龍之助は別に何とも思はず、そのまま馬を進めやうとすると、

「モシ、御武家様」

旅の人は、引き戻すやうに手をあげて呼び止めます

「何か御用か」

「あなた様は、もしや——武州澤井の若先生ではござりませぬか」

「ナニ、澤井の——」

龍之助は、この時、馬をどよめさせて、この旅の人を見据えて見ると、年の頃は五十に近からう、百姓體の男でどうも見たやうな男ではあるが、急には思ひ出せない、右の男は、被つて居た笠の紐を解きかけながら、

「間違ひましたら御免下さいまし、あなた様は澤井の机彈正様の若先生、あの龍之助様ではござりませぬかな」

不思議な旅の男の言分を、じつと聞いて、すぐに猶豫もなく、

「いかにも——拙者はその机龍之助」

これを聞いて旅の男は

「左様でございましたか、それで安心致しました、私共は、あの青



梅在、裏宿の七兵衛と申す百姓でございます」

「青梅の——七兵衛」

萬年橋の上で、抜き打に其の腰を斬つて逃げられた事がある、その盗賊がこの七兵衛であることは、斬られた七兵衛はよく知つて居るが斬つた龍之助は、それを知らない、

「何處へ行くのじや」

「いや、何處へでもございませぬ、あなた様をたづねて、これへ参りました」

「ナニ、拙者をたづねて」

「はい」

「拙者に何の用」

「その御用と申しますのは、あなた様のお生命を……」

「生命を……」

こゝに至つて龍之助は冷笑した

「御驚きでもございませうが、あなた様のお生命が欲しいばかりにこの年月苦勞を致して居る者があるのでござりまする、四年以前に御嶽の山で、あなた様の爲に非業の最期をお遂げなされし宇津木文之丞様の恨をお忘れはござりますまい」

「文之丞の恨」

「その恨を晴らさんが爲、文之丞様の弟御に兵馬様、あなたを覘うて、この大和國に居りまする、こゝで、私共があなた様をお見かけ申したが運のつき、どうか、兵馬様と尋常に勝負をなすつて上げて下さいまし、お願ひでござります」

「尋常の勝負！」



龍之助は、苦笑ひして

「その兵馬とやらは幾つになる」

「ことし十七でございます」

「勝負は何時でも辭退はせぬ故、まづ當分は腕を磨くがよからうとさう申して呉れ」

十七の小腕を以て、我に尋常の勝負を望むとは殊勝に似て小癢である。

「いや、勝負は時の運と申します、兵馬様とて、まんざらの腕に覚えがなければ、敵呼ばりは致しますまい」

七兵衛は笠を取りながら

「兵馬様は、たゞ今八木の宿に居られまする、これより八木の宿までは八里もござりませう、私は一時が間に、そこまで御注進に上り

まするほごに、あなた様にも武士の道を御存知ならば、それまでこれにお控えを願ひたい、引返して御立合下さるならば、八木、櫻井、初瀬の河原、あのあたりで、程よき場所を定めて晴れの勝負を願ひたいもので」

七兵衛はチリ／＼と押しつめるやうに龍之助に返答を促したが龍之助は取り合はず

「勝手にせよ」

腮で馬子に差圖して静かに馬を打たせやうとする

「お逃げなさるは卑怯ではござりませぬか」

七兵衛衛がやゝ冷笑を含んで言ひ放つと、龍之助は

「机龍之助は逃げも隠れもせぬ、これより伊勢路へ出て、東海道を



下る、宇津木兵馬とやらにさう申せ、敵に合ひたくば、あとを慕ふて東海道を下つて参るやうに、追いついた處で何時なりとも望みのまゝの勝負」

七兵衛が尙は何をか言はんとする時、林の中の何處からともなく轟然と鐵砲の音！つゞいて、人の絶叫！

こゝに引かゝつてやり過ごしてしまつた源太郎とお豊の身の上が心許ない、龍之助は七兵衛を打捨て、馬を急がせる、

薬屋源太郎だけ、たゞ一人、道の真中に打ち倒れて居る。その乗つた馬は向うの樹の根に身震ひして立つて居るが、馬子の姿は見えない。

お豊に至つては、馬も馬子も諸共に、何處へ行つたか見えないので

ある。

龍之助は、馬から飛び下りて、源太郎を抱き上げた。

彈丸は股を貫いたらしく、太した傷ではないけれども、驚きの餘りに氣絶して居る

「源太郎どの、源太郎どの」

呼び生かすと、

「む」

「氣を確かに、傷は浅い」

「あゝ……吉田様、早く、お豊を早く……」

源太郎は氣がつくと直ぐに、手を上げて藪の彼方を指すのであつた。思ひ設けぬ不覺である、道中かゝる事の萬一にもと、丹後守が心添してつけられたものを、またその國許を離れない先きに此の有様で



は、何と申譯が立つ。

人に申譯ではない、大切の守り人を眼前に奪はれて、武術の冥利が何處にある。

そればかりではない、お豊は奪はれてならない人である——物に冷ややかな龍之助も齒を噛んで憤った、

「源太郎ごの、賊は幾人ほどじゃ、何か見覚えはないか」

「たしか二人——わしを撃つて置いて、お豊を引捉えて、馬に乗せて、あちらへ、あちらへ」

源太郎の介抱を馬子に任せて置いて龍之助は立つて前後を見る、乗つて来た馬は駄馬である。所詮敵を追ふべき物の用には立たぬ。

少し北へ寄つた原中に、一つの小高い塚、その上には大きな松が聳えて居る。

すゝきの茂る小野の榛原、龍之助は兎も角も、その塚までかけつけて、眼の届く限りを見渡す、たゞ茫々たる原野につゞく、密々たる深林と、遠くは巖々たる山ばかり、人の氣配は更にない

「あゝ……」

喘息をつくと共に冷然たる己れに返つた、いくら尋ねても無駄！案内知つた者ならば、この野原を何れの方角へでも逃げられる、逃げて窮すれば、山の中に入る——山でいけなければ谷へ隠れる、不知案内の自分が、いくら追ふたどて所詮無益である。

龍之助には、咄嗟の間にも利と不利とを判断する冷靜があつた。

## 十四

奈良の春日神社の前、



宇津木兵馬は茶屋へ腰をかけ笠の紐をとく。

「え、毎年五月には子を産みまする、これはつい此の間生れたばかりでございます。エ、もう人間と同じこと、この鹿は一頭で一つしか子は産みませぬ、産まれると、煙草一ぶくの間に、もうひよこ〜と歩き出しますでございます、紅葉ふみわけ啼く鹿と申しまして、秋は子を産む時ではございませんで、妻戀ふ鹿を申しまして、つまり夫婦和合の時でございますな」  
茶店の主人は鹿の話から初めて

「さやうでございましたか、春日様は藤原家の氏神でございますが、もとは鹿島の神様のおうつしでございますから、やはり、御武家様方の守り神でございます、春日四所大神と申しまして、その第一殿が常州鹿島の明神、第二殿が下總香取の明神と申すことでございますりま

する」

案内をかねて、よく物事を教へて呉れる。

兵馬は、こゝで一寸聞いて見なくなつた事は、この奈良の土地から起つた寶藏院流の槍の道場のあとが、まだ此の地に残つて居るとの事であるが、それが今如何なつてゐるかといふ事でした。

「え、鐘寶藏院の槍の道場も、此の興福寺の寺中に跡だけ残つてゐるのでござりまする、春日様へ御参詣をなすつて、二月堂の方から大佛へおゐでになり、それから入らつしやいますと其處に道場だけは残つてゐるのでございますが、槍をお使ひなさるお方は、んぞは一人もおゐではございませぬ」

云はれた通りに來て見ると成程鐘寶藏院の槍の名残の道場、棟行は十二三間もあらうか、總拭の板羽目で、正面には高く摩利支天を砌



請し、見物の處は上段下段に別れて道場の中は廣々として居る。此處でも案内の僧は、よく説明して聞かせました。

「御承知でもござらうが、この寶藏院流槍の開祖は、當院の覺禪房法印胤榮と申して、もとは中御門氏でござつたが、僧徒に似合はず武藝を好んで、最初は劍術を上泉伊勢守に學ばれたものじや、後に大膳太夫盛忠といふものについて槍術を覚え、それより自ら一流を開いたものでござるが、もと武藝は出家の心でない、覺禪房は刀槍を好んで、斯くは一流を開きましたなれど、内心はこれを欣ばれぬじや、わが後の者必ず武藝を學ぶべからずとあつて武器兵器は悉く人に授けて、この寺へは一本も留め置かぬ、されば道場の名は残るといへども、覺禪房限りで、表面この流儀のあとが絶えたわけではござる」

「斯く覺禪房は出家として武藝を後に残すことを好まれなかつたが、門下には錚々たる豪傑が居つたじや、先づ、權律師胤榮といふのが、やはり當寺の僧徒で希代の達人、これが寶藏院のあとをつぎ申して、相變らず槍をやつて居られたやうにござる、一方俗人の方に於ては中村市右衛門尙政といふ者が、これが寶藏院覺禪房直傳じや、いま天下に行はれる當流の槍は、この中村の流れを汲むが多いといふ事である」

案内の僧は慣れゐると見えて、槍をもつがす滔々と述べ立てましたから兵馬は

「このあたりにて、寶藏院流の槍をよくする御仁は誰々でござらうな」

と尋ねて見ると、



「さればさ……」

案内の坊さんは少しく首をひねり、

「當今、伊賀の名張に下石といふのがある、これに寶藏院流正統が傳はつて居るといふ話じや、愚僧は詳しいことは知らぬ、それにまた、術の妙を得た人には、この近い處——」

坊さんは願で、南の方をしやくつて、

「三輪大明神の社家に、植田丹後守といふのがござる、これが當流の槍を仲々よく使うさうじやが、これも一向噂ばかりで、誰も其の實際を見たものはないと申すことじや」

「何と申されました、三輪大明神の社家で、植田丹後守殿」

「左様、植田丹後守、なか／＼學問もある、武藝修業ならば一たびは訪ねて見て御覽じろ」

### 十五

宇津木兵馬が植田丹後守をたづねた時、植田の邸は何か非常に取り込んで居るやうでしたが、それでも丹後守は兵馬の訪問を拒ますに座に通じて武術の話をしました。

「お若いに近ごろ殊勝でござる、して劍道の御流儀は何をお究めなされましたな」

「幼少の頃、甲源一刀流を少くはかり、數年以前より直心陰の流れを汲みまして、未熟者相當の修業中ではござりまする」

「ナニ、甲源一刀流」

「兄なる人につきまして、その手ほどきを受け、それより江戸に罷



り出で、直心陰の門末に列りました」

「直心陰は至極の流儀じや、して御身の師とお頼みなされしは何と申される御仁か」

「下谷の御徒町にて、島田虎之助と申しまする」

「ほう、島田虎之助？」

丹後守は何か思ふ仔細のありげに

「その島田虎之助殿は、もと豊前中津の藩中でござらうがな」

「いかにも、仰せの通り」

「號を見山と申される」

「左様にござりまする」

「そのお人ならば、拙者も近づきがある」

「それは意外に存じまする、何れにて御近づきでござりましたか」

「すつと以前、も早二十年も昔の事、拙者のこの道場に暫く足を留めて居られた事がある」

「それは、不思議の因縁にござりまする」

「拙者が、今までに拜見致した劍術では、江戸で男谷下總守、筑後

柳川の太石進、それから只今申す島田虎之助殿、この三人が至極と

お見受け申した、尤も近ごろは江戸に有名な達人が多く居られるさ

うな、拙者も彼是三十年あちらへ参りませぬ故、これは三十年も前

の話で、今は何とも申されぬが、先づ島田殿ほどの名人は、十年や

二十年に幾人と現れるものでなからう、よき師匠をとり得てお仕合

せに存じまする」

師匠のよい評判を聞くことは、兵馬に取つて自分のことを聞くやう

に嬉しい、何處へ行つても島田虎之助の劍術を賞める言葉を聞くけ



れども、今日この人の口から聞くに餘計難有く思はれる、丁度、最初に机弾正から島田虎之助の名を紹介された時と同じやうな確信をもつて話して居るやうに思はれる。人の技倆を、それだけに見るほご、この人の修養もそれだけに深いものと思へば、奥床しい思ひがする。よい人に會つたと兵馬は謹んで其言ふ所を聞いて居ると、

「島田殿は珍らしい人じや、こちらから話しかければ、いくらでも聞く、聞いたばかりで自分は何も語らぬ」

丹後守は自分で自分の事を言つて居るやうです。丹後守として此んなに話しが撥んで行くのは、これまた珍らしい位でした。

「あの時分、島田は鐵砲玉じやといふ渾名があつたさうな、それは行つたきりで戻つて來ない、つまり、こちらから話しをしかけるとそれを受け入れたばかりで、手答へがないのじや」

「只今も、その通りでござります、それ故に島田は奥行が知れぬと申す者もござります、劍術ばかりで頭は空じやと申す者もござりまする」

「さうでござらう、拙者の邸に足をどよめて居られる頃も、夜更けまでじつと考へて居て、修業者が來ても立會ひといふことは、ほごんどせぬ、強ひて立會を望むと、斯うして相手の面を、しばらくじつと見て居るじや、さうしてニコリと笑つて、立會はせんでも勝負はわかつて居ると斯う申して、それきり、これには相手も腹つた」

「併し、目ざましい立會も一度や二度は、あつた事でござりませう」

「いや、凡そ一ヶ月の間に、一度も左様なことはない、たゞ一度、拙者と槍を合せた事がござる」



「あ、槍の御高名を承はりましたそれ故、一手の御教授を下し置かれたく推参致しました次第でござりました」

「槍の高名——滅相な事じや」

丹後守は忽ちに打ち消してしまひましたが兵馬は其の機会を外さず

に、  
「寶藏院流の槍は、三輪大明神の社家植田丹後守殿に傳はると承はりました」

「以ての外、當今寶藏院の槍は伊賀の名張に下石と申すのがござる、これがよく流儀の統をわきまへて居られる筈、彼處へお越しの時に立ち寄つて御覽じろ」

丹後守は、再び槍の話はさせないやう、しないやうに言葉を避けるから兵馬も、この上押すことは出来なくなつて撫然として居ると、

「最前仰有つた甲源一刀流のこと、ついこの間も、その流儀から出でたものらしい、これも珍らしいお人が見えた」

「甲源一刀流の」

兵馬は、さう聞いて少しく氣色ばむ、關西に於ても甲源一刀流を學んだものが無いことはないけれども其の流名を聞くことは甚だ稀である。その流名を兵馬が聞けばきつと思ひ當ることがある、

「その、お人と申すのは、如何様の人にござりしや、少々思ひ當ることもあるば」

「その構えが無類じや、じつと竹刀を青眼にとつて、たゞ其の儘の形……」

「さては——」

兵馬は我知らず膝を進めて、



「年の頃は」

「卅三四でもあらうか」

「顔色青白く、眼は長く切れて、白い光を帯びた人ではありませぬか」

「その通り」

丹後守の無造作に頷く時、兵馬の眼は燃ゆるが如く、腕の肉自から動く。

十六

「あゝ、惜しい事をした、貴殿のお出でが三日早ければ……」

丹後守は、兵馬から机龍之助の身の上と、兄が遺恨のあらましを聞

いて兵馬の來ることの遅いのをくやんだが、

「どうも、あの宇陀の山を南に吉野山中に迷ひ込みはせぬかと思はれる、只今人をかけて行方を捜索中であるが、もしあの山中へ迷ひ込んだ事なら、容易に見つからぬ」

兵馬は、一たびは力を得、一たびは失望し、さてこの上は自分も吉野郡の山中へ踏み込んで何處までも行方を探がすばかりだと覺悟を決めました。

斯う覺悟をきめて見ると、こゝに悠々として居る必要はない、例の寶藏院槍の事も、この場合強つての所望でもないのですから、

「よき、手がかりを得て忝う存じまする、早速に拙者は仇のあとを追うて、吉野の方へ參ることに致しまする」

「それも宜しうござる、お留めは致さぬが、併し兵馬どの、拙者の



受け申す處では、その机龍之助とやら、稀代の遣ひ手である、ほとんど今の世に幾人となない遣ひ手である容子じや」

「その事は心得て居りまする、憎むべき敵なれども、劔を取つての手腕は甲源一刀流に於て並ぶものがござりませぬ」

「元より、貴殿とても、島田虎之助殿、取立の事なれば、抜かりもござるまいが、何を申すも、まだお年若」

「左様にござりまする」

「殊に、あの太刀先きが難劔じや、疑と青眼に構えて、些とも動かず、相手の出る頭を待つて打つといふ流儀と見受け申した」

「いかにも左様でござりまする、あれは關東の劔客が、名けて「音なしの構え」と申し、彼の龍之助が一流の遣ひ方でござりまする」

「さうでありませう、さて、兵馬殿、失禮ながら、御身にはその音

なしの構へとやらをどの様にあしらはれる、その工夫は……」

「工夫としては更にござりませぬ、たゞ此の太刀先に積もる恨、柄も拳も我身も魂も打ち込めて、彼が骨髓を突き貫く覺悟でござります」

兵馬は少しの疑議もなく言ひ放つ、丹後守は其の一言を限りなく喜んで、

「それではなくては可かぬ、それならば必ず討てませう、よし相討になるまでも、我の受ける傷より、敵に負はす傷が深い……時に兵馬殿、わしが家の道場を見て貰ひたい」

「難有き仕合せ」

丹後守は兵馬をつれて邸内の道場へ來ると、今まで話が槍術に亘る事をすら避けて居たのに、こゝで我から進んで身仕度をして襷をか



け稽古槍をとり下ろしました。さては見處があつて兵馬の爲に寶藏院流の槍の秘術を示す爲か知らん。

十七

話しがまた少し戻つて來ます。

榛原の山道で藥屋源太郎が打たれた時、机龍之助は其の鐵砲の音を聞いて駆けつけたが、七兵衛は早く兵馬に知らせたい事に急がれて鐵砲の音には心を残して西峠まで走せて來た時、そこで行き逢つたのが駿馬に乗つた二人の武士。

この二人の武士も亦時ならぬ鐵砲の音に驚いて、

『さては』

と丹後守の言つた事を思ひ合せた處へ、打つかつたのが七兵衛でした。どうも斯ういふ場合に七兵衛の足どりが穩かでない、

『待て』

摺れ違ひの時に、内山といふ若い方の武士が鋭く七兵衛を呼び留めました。

『へえ……私共でございませうか』

『お前は、今向うから來たやうだが、あの鐵砲の音は何事だ』

『一向存じませぬ、大方獵師さんが雉子でも打つたんでございませう』

元より七兵衛は何も知らない、若し間違であつて拘はり合ひになつては面倒だから、いゝ加減にあしらつてサツサと歩き出すと、内山は餘ほど七兵衛を怪しい者と認めたらしく、



「待て々々」

「いや、急ぎますから、私共は急用の者でございませうから」

「待てといふに待たぬか」

七兵衛は足が早い、それを弱身があつて逃げ出すものと認めたらしく、内山は丹後守から預かつて来た「引落し式」の拳銃を七兵衛のうしろから差向けて、威すつもりで切つて放した弾丸が、七兵衛の右の頬のわき凡そ一尺位の處を風を切つて通ります、

「何をなさいます」

これには七兵衛も驚いた、いくら七兵衛が足が早いとても、鐵砲の玉にはかなはない。足をどよめて振返る途端に左手の林の中へ飛び込みました。

馬上の兩人は彈丸に驚いた七兵衛が、立ち竦んでしまふだらうと豫

期して居た處を、彼は驚くべき敏捷で林の中へ身を投げ込んでしまつたから、

「汝れ、曲者！」

二發、三發、例の拳銃を林の中へ打ち込んで、馬から飛び下りて探がして見たが、もう七兵衛の姿は見えない。

十八

こゝは針ヶ別所といふ所の山の奥の奥。谷合の洞穴へ杉の皮を葺き出して、鹿の飲むほどの谷の流れを前にした山中の小舎。無論、こゝまで来て見ねば、小舎も流れも、何處からも見えはしない、こゝまで来るのでさへ道といふものはついて居ない。



今、その中で人の話聲がする、いかに大きな聲をしたからとて山の上まで響く筈がない、よし山の上へ響いたとて其處には誰も聞く人はない、

「金藏、旨く行つたな」

ゾツとするほど氣味の悪い鍛冶倉は小舎の中へ敷き込んだ熊の皮の上にあぐらをかいて、煙草を吹かして斯ういふ。

「親方、旨く行きました」

金藏はまだ落ちつかない容子、

「まあ、暫くはこゝで窮命しろ」

鍛冶倉は、この邊の山の中へ處々こんな小舎をこしらへて置く、そこへは何時でも十日分ほどの食料を要意して置く、

「親方、斯うなつて見ると俺は一刻も早くお豊をつれて里へ出たい」

「馬鹿な事を言ふな、今連れ出せば畏の中へ首を突込むやうなものだ、七日辛抱しろ、さうすれば、安々と抜けられる」

「七日は永いなあ」

「ナニ永いことがあるものか、手鍋さげても奥山住居といふ本文通りよ、結句山ん中が面白可笑くていゝじやねえか」

鍛冶倉の笑ひぶりは人間並の笑ひぶりではない。生塚の婆様を男にして襟つて見たやうな笑ひ方をする、金藏はその笑ひ方を見て、今更にゾツとして

「親方、お豊は俺の女房だな」

「ふーん」

鍛冶倉は鼻のささで笑つた、金藏は眼の色を少し變へた

「親方、俺はお豊をつれて國越をして見たい、これから直に」



金藏は、今、鍛冶倉の笑ひ方を見てはじめて、お豊をこゝへ置くこ  
とが怖ろしくなつたらしい。

「何だい、何を云ふのだい金藏」

どうも冥府から響いて人を取つて食ひさうな聲

「親方、お前さんはこゝに隠れてお出でなさい、わしは是れから、

お豊をつれて逃げます、ナニ命がけて逃げます」

「やい、金藏、物を言ふには、よく考へて言へよ」

「何だ、親方」

「この野郎、今、俺のすることをよく見て居ろ」

何をするかと思へば鍛冶倉は

「これやい、お豊、お豊坊」

鍛冶倉の背後には、さきから女が一人泣き伏して居る、その帯際を

取つた鍛冶倉。

馬上の武士に鐵砲で脅かされた七兵衛は林へ飛び込んで木の繁みを  
潜つて北へ逃げた。

山邊郡につゞくあたりはよく人家がない、初瀬の裏山へかゝつても  
人家がない。

人家のない事は何でもない、山道を通ることも七兵衛には何の苦も  
ない、山でも林でも、ずん／＼横切つて北へ通して見たら奈良街道  
へ出るだらう、それを南へ直下すれば八木へ着く。

檜の小枝を折つて蜘蛛の巣を打拂ひながら、北を指して行つたが行  
けごも／＼山。

さうして七兵衛は針ヶ別所に近い或る山の上に立つて木の下蔭から



日足の具合を見て、しばらく方角を考へて居ました。

別に疲れも怖れもしないが、いくら山の中の木の葉の繁みを歩いたからとて、夏の事だから汗も出れば咽喉も乾く

「水が飲みたいな」

瀧の音が聞えない、溪流の響きが耳に入るでもないけれど山の山との谷間には多少の水はあるものである。木の葉の雫が澤に落ちて、折々通う猪鹿の息つきになる水を、谷底へ行けば何處かに見付ける事が出来るものである。

七兵衛は、路のないこの山を一つ下りて見やうとして

「はて、誰か此の道を通つたものがあるらしいぞ」  
下崩の中を見て斯う云ひながら下りて行きました。

七兵衛が下りて行つた時分この谷底では、丁度この時、前のやうな

有様でありました。

鍛冶倉が、お豊の帯際に手をかけた時だけは金藏は怖ろしさも忍びも忘れてしまつて、

「親方、如何しやうといふのだ」

前後の思慮もなく鍛冶倉に武者振りつきました。

鍛冶倉はお豊を放つて置いて、そこに投げ出してあつた細引を拾ひ取ると片手に持つて、金藏を膝の下に組み敷く、

「親方、なにをやるんだい」

金藏とても此の頃は可なりの悪黨になつて居る。上から押へられながら、下から刎ね返さうとする、

「この野郎」



鍛冶倉は繩を口でしごいて、處嫌はず金藏を縛らうとする、縛られまいとして、一生懸命の力は金藏といへども侮るべからず、

「な、何だい親方、そ、そう無茶に人を縛るなんて」

「野郎、手向ひをしやがるな」

鍛冶倉は上から押しつぶさうとのしかゝる、金藏は刎ね起きやうと悶搔く途端に、手に觸れたのは鍛冶倉の腰にさして居た山刀。それを奪ひ取らうとして遮二無二引き廻すと、鞘が脱け落ちて身だけが金藏の手に残る、

「アッ！」

何處を突いたか、突かれたか、鍛冶倉は繩を持つたなり二三尺飛び退いて、横腹のあたりを押へながら面をしかめる、血がダラー／＼二三滴熊の皮の敷物の上へ落ちる。

「野郎、突いたな！」

「突いたが、如何した」

けれども、鍛冶倉の引ばつた繩は金藏の首に捲きついて居る、

「アツ、苦し！」

繩をグツと引くとグツと絞れる、

「アツ苦しい！お豊……お豊さあーん」

血の染みた山刀を振り廻して金藏は眼を白黒、苦しまざれにお豊の名を呼びながら無茶苦茶に飛びかゝつて山刀で鍛冶倉の面を斬る。鍛冶倉は左の側腹を刺されて居る、金藏の首へかけた繩は放さなかつたけれど金藏の刀は避けられず、又しても左の額側を一刀やられた、血が迷つて眼へ入る。

「野郎、また斬つたな」



「アツ、苦しい、お豊……お豊さあーん」

向ふが苦しければ苦しがるほど此方が苦しい、

「ア痛ッ」

鍛冶倉は眼へ血が入つたので、夢中になつて、金藏の首へかけた繩は離さずに小舎の外へ轉がり出す、金藏は其れに引ばられて、

「あゝ苦しい！」

もう息の根が止まりさうである。斷末魔の勇氣でまた斬りつけたのが鍛冶倉の肩先さき、

「あツ、また斬りやがつた」

鍛冶倉は外へのり出して、谷水の傍の岩角へ打倒れたが、起き直つてめくら探しに金藏の傍へよる、

「野郎、飛んでもねえ、呑んでかゝつたのが此方の落度だ……覚え

てろよくも俺を斬りやがつたな」

細引をもう一捲き、金藏の首に捲いた時は乳の下あたりを、また深く一つ

「アツ痛ッ！」

今度のは一番痛さうであつたが、

「アツ苦しい！」

金藏の方も、これが一番苦しさうであつた、この一言で雙方の力がグツタリ盡きた。

お豊は此の騒ぎでもう前から氣絶してゐる、つゞいて二人はこんな事をして息が絶えてしまつた。それで小屋の中が森閑した處へ七兵衛が水を呑みに下りて來たのでした。だから七兵衛は丁度これ等の



連中を始末する爲に此處へ下りて來たやうな事になりました。

十九

伊賀の上野の鍵屋の辻といふのは、彼の荒木又右衛門が手並を現はした敵打ちの名所。

その鍵屋の辻に近い吉田屋といふ旅籠屋の一室に、机龍之助は、まだ袴も取らないで柱によりかゝつて居る。

襖一重の次の間で、

「拙者は、田中新兵衛の仕業に相違ないと思ふ」

「いや、拙者はさう思はぬ、田中はそんな男でない」

田中新兵衛といふ名。京都へ上るときに大津を出て、逢阪山の下の

原で、後から不意に呼びかけて自分に果し合ひを申込んだ薩州の浪人がそれだ。

「田中でなくば、あれだけの事はやれぬ、第一證據がある」

「いや、田中なら、あんな事はやらぬ、刀を捨て、逃げるやうな慌はてた真似をする者でない」

「といふて、その刀は田中の外に持つべき品でない」

「さあ、それが拙者にも解せぬ、田中は何とも云はず腹を切つた事

だから、どうも解らぬわい」

「申開きをせず、腹を切つた事だから、云はずと當人罪に落ちたものじや」

「さうとも言ひ切れぬ、何かその間に……拙者もよく知つて居るが

あの田中といふ男は人を斬つたこと幾人か知れぬ、人を斬ることは

あつたこと幾人か知れぬ、人を斬ることは

あつたこと幾人か知れぬ、人を斬ることは



朝飯前と心得てゐる、近頃は仕事が無くて腕が鳴る、誰れか斬る奴はないか、と人斬りを請負つて歩く程の男じや」

「それにしても先方に位がある、威に怖けたかも知れぬ」

「そんな事はない、侍従や少將の位が怖くて暗殺は出来ん」

「役人も、薩州方も、新兵衛の仕業と思ふて居るさうじや」

「拙者は、やはりさう思はぬ、新兵衛ではない」

これだけ聞いたのでは何だかサツパリわからない。人を斬つたのは田中新兵衛である。いやさうでない、斬つて刀を捨て、來た、當人は黙つて切腹した、斬られたのは位のある人——これだけの話の筋を辿れば、彼の主水正正清の長刀を帶して居た新兵衛が、あの刀で誰をか斬つたものだらう、兎に角、あの男は何かやりさうな男であつたが、果して何かやつた。併し切腹とは可哀さうである。龍之助

は、もつと詳らかに其の事を聞いて見たいがと思つて居ると、階下から數多くの人の足音、

「やあ、遅なほり申した」

「これは、諸君」

刀の鞘、袴の裾の音が物々しい、聞いて居ると、それは難多の聲で九州辯もあれば土佐辯もある。

この地の藩の人ではない——近頃流行る浪人者である、と龍之助は直に感づきました。

今の次の間の話——田中新兵衛が何者を斬つたかといふのは斯うである。

これより先き、五月の廿一日に、京都、朔平門外、猿が辻といふ處



で、姉小路少將公知といふ若い公卿さんが斬られた。少將が其の日の夕方、吉村右京、金輪勇といふ二人の家來をつれ、提灯持を先きに立て、御所を出で、猿ヶ辻の處まで来た。御所へ水を入れる處の堰の蔭から、物をも言はず跳り出でた三人の男がある。

大業物を手にして面も身體も眞黒で包んで居た。

「驚破！」

吉村右京は、血氣盛んの壯者であつたから、素手でこの曲者に立ち向つたが、肝腎の主人の刀を持つた金輪勇は、肝を潰して暗雲に逃げてしまふ。

兇漢の中の一人、すぐれて長い刀を持つたのが、吉村を他の二人に任せて、姉小路小將を目かけて一文字に斬りかゝる。

抜き合はすべき刀は金輪が持つて逃げてしまつた。

「小癩な！」

姉小路少將は、持つて居た中啓で受止めたれども、それは何の効がない、横髪を一太刀なぐられて血は満面に迸る。

二の太刀は胸を横に充分にやられた、それでも豪氣の少將は屈しなかつた。

「慮外者めが！」

兇漢の手元を押へて、その刀を奪ひ取つてしまつた、その勢ひの烈しさにさすがの刺客が、刀を取り返さうともせず、鞘までも落した儘で一目散に逃げてしまつた。

吉村に向つた二人も、つゞいて逃げ去つてしまつた。

姉小路少將は重傷に屈せず、奪つた刀を杖について、吉村に介抱さ



れながら邸へ戻つて来たが、玄關に上りかけて、

「無念！」

と一聲言つたさきりで倒れて息が絶えた。

生年僅か廿八歳（或は卅歳）であつたといふ。

この姉小路といふ人は、體質は弱い人であつたけれども、十九位の時に夜中忍び歩いて、關白以下の無氣力の公卿を殺さうといふ計畫を立てたほどの氣象の荒つばい人であつた。東久世伯は、こんな事を云ふ、

「さうさ、我々の仲間では、あれが一番豪かつた、岩倉とどちらであらうか、兎も角も岩倉と匹敵する男であつた、岩倉よりも膽力があつて壓が強い方であつた、併し氣質と議論が違ふから到底兩立は出来ない、岩倉をやつゝけるか、やつゝけられるか、どちら

らかであらうと云はれましたが、誠に惜しいことをしたものです」  
また其の頃の蔭口に、「三條公は白豆姉小路卿は黒豆」といふ言葉もあつた。

これほどの人が何故に殺されたか、その詮議よりも先づ何者が殺したかといふ詮議であつたが其處に残された刀が物を言ふ。

その刀は縁頭が鐵の腐でそこに「田中新兵衛」と持主の名前が明瞭に刻んであつた。

中身は主水正清。

拵へは、すべて薩州風、落ちて居た鞘までが薩摩出来に違ひないのであつた。

「田中新兵衛」

薩摩の田中新兵衛とは何者？とたづぬるまでもなく、其の時分評判



者の斬り手である、人を斬りたくつて斬りたくつて堪まらない男である。島田左近を斬つたのも此の男だと云はれて居るのである。

さうして當時有名な志士の間にも交際がある、現に四五日前も、姉小路少將の家へ来て何か意見を述べて行つた事があるといふ、

「田中を捉まへろ」

田中は平氣で薩州の邸内に寝て居た、呼び出して調べて見ると、

「左様な事は存せぬ」

頑として、首を横に振る、

「存せぬとは卑怯であらう」

役人は詰る、

「卑怯とは何だ、知らぬ者は知らぬ、存せぬ事は存せぬ」

新兵衛は役人を睨め返した、

「證據が物を言ふぞ、隠し立てををするな」

役人は突込む、新兵衛は怫然として、

「田中新兵衛は人を斬つて、刀を捨て、逃げるやうな男ではござらん」

飽くまで手剛いので、役人は下役を呼んで持つて來さしたのが、例の捨て、逃げた刀である、

「新兵衛、この刀に覚えがあるか」

役人は、それ見たかと云はぬばかり

「拜見」

新兵衛は、其の刀をとつて見た。自分の刀である。

「さあ、どうじゃ、その刀は誰れの刀であるか」  
新兵衛は疑と見て居たが、



『これは拙者の差料に相違ない』

『さうであらう』

役人は勝利である。

こゝに至つて、潔き新兵衛の白状ぶりを期待して居ると、新兵衛は其の刀を取り直すが早いか我が脇腹へ突き立てた、

『や！』

並み居る役人も、番卒も一同に仰天した。支へに行く間に、もう新兵衛はキリキリと引き廻して咽喉笛をかき切り美事な切腹を遂げてしまつた。

あまりの事に一同の開いた口がふさがらなかつた。

新兵衛は刀は確に自分の物と承認したけれど、姉小路を殺したのは俺だと白状はしなかつた。

これが爲に、疑問はいつまでも残された。

龍之助の次の間でも問題になつたが、一説には、その前日、新兵衛は三本木あたりの料理屋で飲んで居るうちに何者にか刀を摺かへらしたといふ。武士が差料を摺りかへられた事は話にはならぬ、さうが田中が其の當座借返つて居たといふ。

兎に角、姉小路を殺したものの、何者であるかは今日でもわからない。恐らく新兵衛ではあるまいといふ事。

龍之助のある次の間へ多くの人が入つて來たので、田中新兵衛の噂は立ち消えになつたが

『女中、あの襖を外して呉れ』

彼等の集まつたのは龍之助の隣りの十疊の間を二つ打ちぬいたので



龍之助のはそれにつゞいた六疊一間であつたが、今向ふでその襖を外せと云つたのは集まつた浪人の中の重立つた者らしい。

「あのお隣りにはお客様がおゐでござりまする」

「ナニ隣に客がある、その客といふのは何者だ」

「はい、矢張お武家様でござりまする」

「ふむ、武士か、幾人居る」

「お一人でござりまする」

「二人——然らば何とか都合をしてそのお客を他の座敷へやつてくれ」

「はい……」

「我々共が、この三間を通して借り受ける、隣のお客に體よく申して立ち退かして呉れ」

「お話しを致して見ませう」

女中は心なくお受けをして引き下がつた容子、浪人連は

「熱かつたな」

「中々熱い」

「風呂に入れ」

「今、酒井と那須が入つて居る」

「さうか、氷を食へ」

氷を嚙る音がりく

「今聞けば、このつい先きが健屋の辻といふて荒木又右衛門が武勇を現はした處じやさうな」

「うむく、それを今知つたか」

「面白い、荒木の井六番斬なんといふのは、よく張扇で聞くが、い



つも壯快じや、荒木の前に荒木なく、荒木の後に荒木なしと云つてな

「山陽の作つた詩に、こんなのがある、一つ歌つて聞かさう、よく聞け」

「謹聴」

詩を吟ずることを得意にする者が興に乗じて歌はうといふ、一同はそれを謹聴するものらしい、

伊賀城頭西閨門、

復讐跡あり恍として血痕、

仇人、馬に騎り魚貫して過ぐ、

挺刀一呼、渠が魂を奪ふ、

姉夫慷慨にして兼て義に従ふ、

脊令原寒うして同じく冤を雪ぐ、

一水西に渡れば是れ嶠原、

當時投宿の館は尙ほ存す、

吾れ來つて燈を挑げて往昔を思ふ、

想ひ見る淬刃曉暎を候ふ、

嗟哉士風猶薄夫をして敦ならしむ、

寛永の俗、今誰と論せん、

詩は吟じ終つて暫らくの間靜かである。それにしても、もう立退き

命令が來さうなものじやと、隣室の龍之助は心待ちにもなるがなか

く來ない。

一寸、隔ての襖を細目に明けた者があつたやうだが、明けて直ぐに

立て切り、



「まだ居るわ、隣りに男が一人居る」

明けた男は、やゝ小聲であつたけれど龍之助にはよく聞える、

「まだ居るか、女中奴何とも云はん」

ハタ／＼と手が鳴る、

「お召しになりましたか」

忙はしげにやつて来た女

「これ／＼女、ナゼ最前申つけた通り、隣室へ申入れん」

「はい、どうも相済みませぬ、つい忙しいものでございましてから」

「早速申入れろ」

「はい、只今……」

女中は、すぐに來るかと思ふと、すぐには來ないで一旦下の座敷へ行つてしまつたらしい。龍之助は袴でも取らうかと思つて居る處へ

「御免遊ばせ」

例の女中が入つて來て、

「旦那様、風呂をお召しになりましたは」

「まだ入りたくない」

「あの旦那様、お隣室が混み合ひまして、誠にお喧しうございませう、あの、少し手狭ではございますが、あちらの四疊半が明いては

りますから、御案内申しませうか」

「此室で宜しい」

此室で宜しいとキツバリ云はれたから女中は二の句が次げなかつた

が、やつと

「それでも、こゝは、あのお隣室のお客様が夜更けまでお話になる

とお困りでせうから」



「いや、賑かで却てよい」  
 膠もない言葉である。

「それでは、どうも……」

切り出しが拙かつたので、女中はへト〜になつて言葉を濁して出てしまひました。

しばらく経つと、また隔ての襖が二寸ほど開いて、凝と此方を見たのは眼の大きい面の色の赭黒い總髪の男であつたが、今度は篤と龍之助の面を見定めてから、また襖を締め切り

「まだ居るぞ」

「まだ居る？」

また手がハタ〜と烈しく鳴る

「お召しになりましたのは、こちら様で……」

恐る〜やつて来たのは以前の女中でなくて番頭

「貴様は何だ」

「へえ、番頭でございます」

「最前から、この隣室を開けて貰ひ申すやうに、再三申つたところ、何で其のやうに取計らはぬ」

「恐入りましてございます、では手前からもう一應」

番頭は非常に恐縮して、すぐ其の足で龍之助の處へやつて来ました。

「御免を願ひまする——」

「何用じや」

「どうも、混雑致しまして、行き届き兼ねまする、時にお客様——  
 甚だ申兼ねた儀でございますが、このお部屋は、ちと喧しうござり



ますので、ごうか、あちらへお引移りを願ひたいものでござりまし  
て……」

「いや、こゝで宜しい、却て賑かでよい」

「へえ……」

番頭は思はず頭に手を置いた、

「それに致しまして、お隣室の衆が、お氣の荒いお方の様に見え  
まするから、もし間違ひでもありません……」

「いや、心配する事はない」

「でも、もしや、お間違ひが出来ますと、あなた様のみならず手  
前共まで迷惑致しまするから、どうぞお引移りを」

「こちらが黙つて控へて居れば間違ひの起る筋も無からう、心配す  
るな」

「でもござりませうが……」

「こゝで宜しいと申すに」

番頭は因じ果た、この時、隔ての襖を荒つぽく引き開けて、

「御免」

案内もなく入り込んで来たのは、髻を高く結び上げて、小倉の袴を  
穿いた逞しい浪士であります。手には印籠鞘の長い刀を控へて、

「番頭退け——」

龍之助の前へ控然と座つて

「初めて御意得申す」

「何か用事でござるか」

「さきほどから、再三、宿の人を以て申入れる通り、我々は御覽の  
通りの多勢じや、お見受け申せば、貴殿はお一人、ごうか、この席



を多勢の我々に譲つて戴きたい』

「その儀ならば、お断り申す」

「ナニ、断る」

印籠鞘の武士は眼に角を立て、

「女中や番頭共のかけ合ひとは事變り、武士が頼みの一言じや、氣をつけて挨拶を致せ」

龍之助は武士の方には取り合はないで、番頭の方を見て、

「番頭殿、この氣狂ひを、あつちへ連れて行つてくれ」

印籠鞘は激昂して

「氣狂ひとは何だ……氣狂ひとは聞き捨てならん」

「まあ、その處を一つ——どうかさういふわけでございますから旦那様、多勢に無勢で、どうもはや、どうかお引うつりを願ひ

たいもので……」

番頭は天手古舞をはじめめる。

「汝れは、間牒じや、幕府の犬であらうな」

印籠鞘の浪士は龍之助に詰め寄せる、

「やれ〜！」

今開け放して置いた襖の間から七ツ八ツの、何れも穩かならぬ面が最前から現れて、この無作法な浪士の後援をつとめて居たのが今一齊に彌次り出した。

何處へ行つても、今頃は、こんな血の氣の多いのに打突かる事が珍らしくない。いや、龍之助は、これよりもつと〜生命知らずの新撰組や、諸國の浪士の間に白刃の林を潜つて來た身だ。白い眼で、じつと見て、左手で植田丹後守から餞別に貰つた月山の



一刀を引寄せよ。

龍之助は、この刀を持つてから、まだ人を斬つた事はないのである。さりとは餘り物ずきな、この連中を相手に喧嘩を買つて見る氣か知らん。

浪士等は、一喝の下に嚇して呉れやうと威勢を見せたが、案外、手答へがなく、シンチリとして、蒼白い面に、憤つて沸くべき血の色さへも見えず、賣りかけられた喧嘩なら、いくらでも買ひ込む氣象を見せて、刀を引き寄せた龍之助の舉動を見て、且は呆れ且は怒つたのであります。

「汝れは、生命といふものが惜しくないか！」

印籠鞘の浪士は居合腰になつて刀を捻つたのである。

「生命なんぞは惜しくない——」

彼は月山の新刀を手にとると、此の時むらくとして無暗に人を斬りたくなつた。

「いけません、いけません、どうかまあ、あなた様もお鎮まり下さい、こなた様もお控へ下さい、手前共で迷惑を致します、外のお客様にも御迷惑になります、どうか、お抜きなされる事は、御用捨を願ひます、御用捨を願ひます」

番頭は必死になつて、支へて見たけれども、元より其の力には及ばない。

「宿を騒がしても氣の毒じや、どうだ諸君、これより程遠からぬ處に鍵屋の辻といふのがある、鍵屋の辻へ行かり、音に聞く荒木又右衛門が武勇を現した處じや、そこで一番、火の出る切合をやつて、伊賀越の供養をして見たいなあ」



彼の印籠鞆の武士は衆を顧みて腕をまくり立てる。

「結構、事の血祭りに幕府の間牒を斬れ、伊賀の上野とは幸先きがよい、やい、幕府の間牒、表へ出る、荒木が卅六番斬の名所を見せやる」

彼等は龍之助を、その鍵屋の辻へ引ぱり出して斬つてしまはうと考へたらしい。まことに無意味な行が、りに過ぎないけれども龍之助はそれを拒むべき人ではなかつた。

この時、向ふの室の床柱を背負つて、さきから少しも動かすに茫然と事の成行を見て居た小兵にして精悍、しかも左の眼のつぶれた男があつたが、

「各々方、詰らん事をなさるな」

小兵にして精悍な左の眼のつぶれた右の浪士は、膝の上に繪圖をひ

ろげて眺めて居ながら、最前からの騒ぎは、他を吹く風のやうにして居たが此の時はじめて頭を振り向けて斯う云つた。

「餘りといへば無禮な奴」

「無禮は、こちらの事」

「先生、これは間牒でござる、幕府の犬に違ひござらぬ」

「何にしても、各々方よりは少し強いやうじや」

「宿を騒がすも氣の毒故、鍵屋の辻へ引ぱり出して斬つてしまはうと存じます」

「あべこべに、斬られてしまうぞ」

「何を、多寡の知れたる間牒」

「フム、此方で模様を見て居ると、先方の方が餘程強い」

「左様な事はござりません、先生にも似合はん事を仰有る」



「強い、強い、先方が強い、この分で、鍵屋の辻へ行かうものなら  
瞬く間に、各方が撫で斬りになる」

「これは先生のお言葉とも覺えん、さほごに我々を見縊り給うか」  
「兎に角引き上げ給へ、こちらの出やうが悪い、かけ合ひが禮儀で  
ない」

小兵にして精悍な、左の眼のつぶれた浪士と他の浪士共との間答は  
こんな風であります。味方をたしなめて敵の者を賞めて居る。龍之  
助はその言葉つきの妙に落着いたのを聞いて、その何者であるかを  
訝つて居たが、亂暴な浪士共の氣勢は、これですつかり折れてしま  
つた。

「さて、明日は大和へ入つて、萩原へ泊る、それから宇陀の松山へ  
出やうか、初瀬へかゝらうか」

左の眼のつぶれた浪士は、また地圖を擴げて

「萩原から松山まで二里一町——松山から上市までが四里と十三町  
——これを初瀬の方へ廻ると萩原から一里十七町、三輪、櫻井八本  
へ出て南へ下る」

里數を、あれからこれと數へ立てられて一座の浪士は烟に捲かれる  
「さあ、各方、こゝへ來て、地圖を御覽なされ、那須氏には、よう  
此の道を御存知の筈じや、十津川入りには、何れの道をとつたがよ  
いか」

「左様、十津川入りには……」  
一番先へ喧嘩に出たのが壘の上に擴げた繪圖面の方へ首を持つて來  
て、

「初瀬から八木へかゝるが、道は宜うござるが、近道は……」



「松山へ出た方が近うござるか」

「左様——」

どうやら、この繪圖一枚で喧嘩が納まりさうである。

この左の眼のつぶれた人は、十津川天誅組の巨魁松本奎堂であつた事が後に知れる。

## 二十

お豊は、我を忘れて欄干の上から下の往來を見おろした時に、薬屋の前を總勢十人ほどの旅の武士が隊を成して通り過ぐるのを認めました。

「あゝあの方は確かに……」

笠を深く被つては居たけれど、お豊は其の旅の武士の一隊の中に龍之助のあることを確かに見とめたのであります。

お豊は周章で梯子段を下り盡したけれども、彼の十人ほどの武士の一隊のうちの一人も店へ入つて来た人影はありませんでした。店先に打ち水の空手桶をさげてぼんやり立つてゐるのは女中一人

「お光さん、今こちらへ、お客様がお見えになりましたでせう」

「いゝえ」

「それでは、こゝを十人ばかりのお武家さまがお通りになつたでせう」

「あ、お通りになりました」

「そして……どちらへお越しになりました」

「鳥居のわきを南の方へお出でになりました」



「まあ、さうでしたか、それでは違つたか知ら」

お豊はそれから若しやと植田丹後守の邸の前まで行つて見ました。併し、邸はいつもの通り穩かなもので、下男の久助が打ち水をして居る。

「久助さん、久助さん」

「おや、お豊さんか」

「あの、只今お邸へお客様がありましたか」

「いや、さつき郡山からのお使ひが一人見えたつきり、正午前の中は武者修業が三人ほどお出でになりましたが直ぐお歸りでした」

「あゝ、さうでございましたか、あの、たつた今十人ほどのお武家が、こちらへお通りになりましたから若しや、お邸のお客様ではないかと思ひまして」

「いや、そんなお客様はお出でがない、十人はさて措き一人もお見えになりませぬ」

「さうでございましたか」

お豊はこゝにも言はん方なき失望でありました。

川上へ雨が降つたので、初瀬川の水嵩は増して居ました。河原の中間にあつた地藏堂は引き上げられて、やゝ離れた竹藪と假橋の間に置かれてあつたがその藪へも水はひたくと寄せてゐるのでありました。

お豊は假橋から向うを見渡したけれど、櫻井の町の燈火が明るく見え、多武峰が黒ずんで居る外には人の影とては見えないのでありました。



うす月は三輪山の上を高く登つて居るのに、河原は何となく暗い  
— 涼しい風は颯と吹いて来た、河波を逐ふて螢が、淋しいものゝ  
やうにゆらり〜と行く、

『あゝ、わたしとした事が、何でこんな處まで来たのでせう』  
幻影を追ふて夢の里を歩み、何かに引かれてこゝまで来たが、氣が  
ついて見ると、お豊は自分ながら何でこんな處へ来たのがわかりま  
せんでした。

此處へ來ると氣が抜けて、お豊は行くのもいや、歸るのもいやにな  
りました。

地藏堂の傍の蛇籠へ腰を掛けてしまひました。さうしてばんやりと  
夜の河原をながめてゐました。頭は色々の事を考へて一ばいになつ  
てゐました。

『お豊さん』

地藏堂のうしろから不意に人が出て来たので我に歸りました。

『お豊さん、わしは金藏じや、驚きなさるな』

『まあ、金藏さん——』

迷うて来た——金藏は、どう〜幽靈になつて自分にとりついて  
た。驚くなど云つてもこれは驚かすにはゐられない、お豊は身の毛  
がよだつて、足がすくんでしまひました。

『お豊さん、驚いちやいけません、金藏です、金藏が斯うして生き  
返つて来たのですよ』

藪影から出て来た金藏は、絲楯を脊に負つて小さな箱を筋かひに肩  
へかけて旅商人體に作つてゐました。

『さあ、そんなに驚いちやいけませんといふに、お化けじやありま



せんよ、金藏は生き返つて来たのですよ、お前さんといふものが思ひ切れないで生き返つて来たのですよ』

あゝ、生き返つて来たのに違ひない、幽霊でもお化でも何でもなく生のまゝで金藏はこゝに立つて居る

『金藏さん、お前は助かりましたか』

お豊は逃げることも出来ないのです、やつと斯う云つて見ますと、

『あゝ、助かりました、あの時、針ヶ別所の山の中で、鍛冶倉の奴に苛い目に遭つて、首へ細引を捲きつけられましたがな、わしはまた、鍛冶倉を山刀で無暗に突き立て、突き殺しましたよ、わしも一旦は縊り殺されたのですがね、しばらくすると息を吹き返しましたよ、誰か知らん、首に捲きつけた細引を釋いて呉れた人があつたのでね、やれ嬉しやと小舎へ這ひ込んで見ると、お豊さん、お前の姿

は見えないや……』

金藏は中腰になつて、お豊の前で、あの時の物語をはじめます。

『見れば鍛冶倉の奴は傍で死んで居るし、それでは、お豊さん、お前が逃げる時に、わしの首から細引を釋いて行つてくれたのかと思つた時はわしは嬉しかつたよ』

『あの、それは……』

『それだけでも、俺はお前さんの親切が嬉しくつてくゝあれからわしは谷を這ひ廻つてやつと里へ出て、惣太が家へ、二日ばかりかくまつて貰つて、それから身體もすつかり快くなつたからね、わしはお前、こんな風に薬賣りの真似をしてね……どこへ行くものか、この界限を夕方になるとはブラついて、お前の容子を見て廻つて居ただよ、どうか、お前に一眼あひたいと思つてね』



「まあ……」

「お前さんが、旅の人に助けられた事も、薬屋へ送り届けられた事も、薬屋で養生をして元の身體になつた事も、直ぐわかりましたよ。だからわしはお前さんの家へ忍び込んで、お前さんを奪ひ出さうと斯う思つたがね、荒つぽい事をする前に、一應お前さんに直接にあつて、わしの心の丈を、よく聞いて貰つた上の事にしやうと、毎日々々、お前さんをつけ覗つて居たが、お前さんは丸きり外出をなさらぬ、いよ／＼今晚こそと、思ひ込んだ矢先き、お前さんは大急ぎで二階から下りて、植田のお陣屋の方へ行きましたね、占めたどわしはあの時から、お前さんのあとをつき通しで、こゝまで来たのですよ」

あゝ、何處まで執念深い男であらうとお豊は身慄ひを止める事が出

来ません、

「金藏さん、お前のお心は有難いけれども、何卒勘忍して下さい」

「お豊さん、心配しなくてもいゝよ、わしはこゝでは、手荒い事はしませんよ、たゞ今晚は、お前さんに、わしの心の丈を聞いてもらいたいのだよ」

「金藏さん、お互に、もうそんな事をよしませう、わたしは歸ります」

「歸しません、一通り、わしのいふ事を聞いてくれなければ、こゝは動かさないのですよ、お豊さん……お前さんの爲に、わしがどれ程苦勞したか、お前さんは知るまいねえ」

金藏はホロ／＼聲です、金藏は生え抜きの悪徒ではなく、親に甘やかされた放蕩息子の上りですから、本氣になつて物を言ふ時には、



お坊ちゃんらしいところがないではない

「わしばかりではなく、わしの親達まで、お前さんの爲に、飛んだ苦勞をして居るのだよ、あの時に、お豊さんが、私の處へ来て呉れらば、わしも人殺しなんぞをしなくてもよかつたのだよ、ねえ、お豊さん」

「……………」

「いゝかえ、わしは、お豊さん、兇狀持ちなのだよ、今にも役人につかまれば首を斬られてしうのだよ、お前の叔父さんを鐵砲で撃つたのもわたしだよ、鍛冶倉を殺したのもわたしだよ、ソんなに悪い事をするつもりは無かつたけれども、お前さんといふ者に迷ひ込んで、ソんな悪いことをしてしまつたのだよ、お前さんといふ人が三輪へ來なければ、わしはこれほどまでに悪い人にはならなかつたのだよ」

だよ」

「ほんとに済みません、わたしが來なければ、宜かつたのでございます……………」

「あ、お豊さん、よく言つて呉た、わしはお前さんに済みませんと言はれたのが嬉しい……………」

金藏は、どうしたのか面を伏せて沈んで涙を拭いて居るらしいのです。お豊は、どうも可哀さうになつて、

「金藏さん、わたしが三輪へ來たのが悪いのですから、勘忍して下さい、さうしてお前さん、わたしを思ひ切つて、早く遠い國へ立ち退いて下さい、女ひでりの世ではあるまいし、わたしのやうな者をそんなに思つて下さらなくても、世間には随分立派なお方があるのですから、あなたもお若いに、男の器量ではありませんか、ごうか、



わたしを思ひきつてお役人に見つかからないうちに、遠くの方へ逃げて下さい』

『あ……ありがたい……お豊さん……』

金藏は泣いて居る。

『お前さんに、さういはれると、わしは思ひ切りたいが……お豊さん、そんなに言はれ、ば言はれるほど、思ひ切れなくなつてしまふ』

『あ、どうしませう』

『お豊さん、お前を思ひ切る位ならわしは死んでしまつた方がよい』

『そんな事を云ふものではありません』

『お前さんが、わたしの言ふ事を聞いて呉なければ、わしは死にます、自分で死ぬか、役人につかまるか、どの道、わしは死んでしまふのですよ』

『それですから、早く逃げて下さい、お金が入用なれば、少し位、どうでもして上げますから』

『お金はあるよ、家を逃げ出す時に持つて居たのが、まだこの箱の中にソツクリあるから、逃げやうと思へば、旅費には困らないのだよ』

『そんなら、金藏さん、ずつと遠く江戸の方へでも、お逃げなさいさうして居るうちに縁があれば、またお眼にかゝりませうから——わたしも實は江戸の方へ参らうかと思つて居るところでございますよ』

『ナニ、お豊さん、お前が江戸へ行く、それはほんと、ほんとならば一緒に行かう、是非一緒に逃げませう』

金藏は涙の面をヤツト擡げる、お豊は言い過ぎたのを氣がついて、



「けれども、わたしのは、いつの事だか知れませんが、お前さんののは急場ですから」

「そんな事を言つても駄目、わしに一人で江戸へ行けなんと云つてもそれは駄目だよ」

「そんな事を言はずに、お逃げなさい、あの景のよい東海道を下つて、公方様のお膝下の賑かさを御覧なされば、わたしの事などは思ひ出す暇はありやしませんよ」

「駄目だ、公方様のお膝下が、いくら賑かでも、お豊さんといふ人は二人と居やしないからねえ」

「どうも困りました」

お豊は、もう何と言ひ賺すことも出来なくなつてしまつたものです。「お豊さん、わしは斯う思つて居るのだよ、まあ聞いて下さい、わ

たしの爲にわたしの親達までが、この土地に居られなくなつて、立ち退いた事は、お前さんも知つて居るでせう」

「はい……」

「その、わしの親達はね、母親の里なのですよ、紀州の山奥に龍神といふ温泉場があるのですよ、そこでね今温泉宿をやつて居るのですよ」

「はい……」

「こちらの身上を、すつかり片づけて、紀州へ隠れて、かなりの温泉宿をやつて居るのですよ、どうです、お豊さん、そこへわたしと一緒に行きませんか」

「紀州へ？」

「エ、わたしもね、お前さんの叔父さんを鐵砲で撃つたけれども



それは些ども悪氣があつてやつたわけではなし、お前さんを欲しいばかりでした事なのだよ、仕合せに傷も今では、すつかり直つたさうだし、鍛冶倉の野郎は殺した方が人助けなんですからね、國越をしてしまへば、もうそんなに役人に睨まれることはないのですよ、紀州の龍神へ行つて温泉宿をやり、わしが亭主になつてお前がお内儀さんになつて、所帯を持たうではないか、ね、さうして下さい、お豊さん』

金藏は、ねんごろに、首をさげ手をつかンばかりにしてお豊の前に願うてゐる

『けれどもねえ、金藏さん、お前のお心はほんとうに有難いと思ふけれども……』

「ウム、やつぱり可けないのかいお豊さん、どうしても、お前はわ

しの言ふ事を汲みわけてくれないのかい』

『お前さんの心は、よくわかつて居るけれども……』

『心だけでは駄目だよ、お豊さんが、わしの言ふ通りになつてくれなければ、わしはドノ道無い命だからね……』

『金藏さん、どうか短氣な事をしないで辛抱して下さいよ、そのうちにはねえ……』

『その中にはどいつて、お前、その中にわしが役人につかまつたらどうします、どうか、お前さん、わしと一緒に逃げて下さいよう』

『そんな事を仰やつては困ります』

『そんなら、お豊さん、どの道捨てる命だから、わしは死ぬ、死ぬけれども一人では死なないよ、あ、一人では死ねないのだよ、お豊さん』



『どうも困りました』

『困ることはありやしない、お前さんが、わしの心を汲みわけてさへ呉れたなら、わしの命も助かる——お豊さん、わしは、お前のからだに指一本だつて指しやしないよ、ねえ、お豊さん、いゝかへ』

『金藏さん、そんな事は出来ません』

『出来ない』

『エ、少し都合があつて、お前さんと一緒に逃げる事は出来ません』

『ほんとに出来ない——出来ない——そんなら』

是に至つて金藏は懐中から短刀を一本取り出します

『お豊さん、では、お前を殺して死ぬよ、無理心中だよ』

金藏は悪黨に返つた、

『金藏さん、殺して下さい——』

意外にもお豊は驚かなかつた、

『こゝで、お前に殺されたとして、誰も、わたしが、金藏さんと心中したと思ふものはありますまい、どうせ、わたしも罪の盡きない身體ですから、お前さんに殺されて上げませう、さあ殺して下さい』

『ナニ、殺せ……よし殺すとも』

金藏は短刀の鞘を拂つて、お豊の胸元を左の手で掴む、お豊は争はず、斯うなつて見ると無茶な金藏にも刃が下せない

『お豊さん、殺される命なら、なぜ生きた身體をわしに呉れないのだい……同じことじやないか、生きて居た方が割がいゝじやないか』

『金藏さん、もうそんな事を言はないで、早く殺して下さい』

『殺す、殺すには殺すが……お豊さん、もう一ぺん考へて見てお呉』



ん」

「わたしは死だ方が宜うござんす」

「死んだ方がいゝ……あゝ、なせ、お前はそんなにわからねえのだよし、殺す……さうしてお豊さん、わしは、こゝでお前を殺して置いてね、薬屋の家へ火を放けるよ、それから陣屋の植田へも火をつけるよ、その上に三輪の神杉へも鐵砲の煙硝を振りまいて火をつけるよ、さうして薬屋の者も丹後守の奴めも、殺せるだけ殺して、わしはその火の中で焼け死ぬのだ、いゝかい——」

「まあ、金藏さん——待つて下さい、待つて下さい、金藏さん——お豊は今となつて、金藏の手を抑えて、

「金藏さん、お前は、わたしの命をとつた丈では勘忍が出来ないかい、そんな大それた事をホンとに……さる氣かい」

「するとも——あの薬屋の源太郎奴は、わしの親から、お前さんを貰いたいと頼んだのに、天から謝絶つてしまやがつた、あの丹後守は、お前を隠して、わしに會はせなかつた、この二人は深い怨みだから、わしは、こゝで、お前を殺して置いてその怨みを晴らすのだから、刷毛ついでにあの三輪の社へ火をかけて、丸焼きにして呉る」

「あゝ、どうしませう、金藏さん、それだけはよして下さい、わたしを此處で存分に斬るとも突くともしてそれで他の怨みは帳消しにして下さい」

「さうは行きませんよ、わしの親達が、先祖からのこの三輪の土地に居られなくなつたのは誰のお蔭だい——わしはもう、あの三輪といふ處を焼き亡ぼしてしまつて、さうして其の火の中で焼け死ぬのだよ」



「金藏さん、なせ、お前はそんな怖ろしい事をします」

「そんな怖ろしい心にしたのは、誰だい、お豊さん、お前ではないか」

「金藏さん、そんな無理な事を言はないで……」

「何が無理だい、お前が人のお神さんならば、わしの言ふ事が無理かも知れないが、お前は定まる夫のない身ではないか、それにわしが思ひついたのが無理かい」

「あゝ、わたしは、どうして宜いかわからない——」

「わからない事は無いのだよ、わたしと一緒に、お前が逃げて呉れさへすれば、わたしは全く心を入れかへてお前が商賣をしろと言へば商賣もする、江戸へ行きたいと云へば江戸へ行く、どうしてお前の中からだに、こんな怖ろしい刃物なんぞを當てゝよいものか……お前

を大切の大切のものにして可愛がるのだよ、薬屋や、お陣屋へ火を放けるなんぞ、そんな大それた事を、誰が好きこのんでやるものかな……お豊さん、もう一べん考へ直して下さい、わたしは、お前が思ひ切れない——」

金藏はお豊の胸倉をはなして、其の手で瀧のやうに落ちる自分の血を拭きました。無體の戀慕ながら真劍である、怖ろしさの極みであるけれども、其の心根を察してやれば不憫もある。

「金藏さん、わたしには、わからない、どうして宜いのかわかりません」

「お豊さん、そこで静かに考へて下さい、わたしも考へるから」

お豊の見た眼に誤りはなく、机龍之助は彼の伊賀の上野から、松本



奎堂等の浪士と一緒になつて、また大和國へ逆戻りをして来たも  
のです。

藥屋の二階から其の姿を認めて、お豊がこゝまで足を引  
も、丸きり夢ではありませんでした。

然らば、龍之助は今何處に居るか——何でもない事。川を隔てた直  
ぐ向ふの櫻井の町へ、一行の浪士と共に宿をとつてゐるのでした。

これ等、浪士の一行が、この後、中山忠光を奉じて旗上げをした「天  
誅組」の卵であることは申すまでもありません。

「天誅組」は天忠組である、天朝へ忠義を盡す義士達の寄合である  
さうして、机龍之助は、彼の「新徴組」から新撰組にまで、腕を貸  
した男である、新徴組や新撰組は幕府の味方である、天忠の志士と  
は根本から目的が違うのであります。

では、机龍之助こそ、松本奎堂あたりに説かれて、改めて天朝へ忠  
義の心を起したか、徳川へ盡す志を變じたか。

そんな筈はない、龍之助が新徴組に腕を貸したのとて、何も徳川  
に恩顧があるわけでもなければ、幕府を倒してはならないといふ義  
憤があるわけではないので、たゞ行きがより上さうなつたまでとあ  
ります。

されば、「天誅組」の仲間になつたとしても、事改めてギリ／＼齒を嚙  
んで尊王攘夷を絶叫するなんといふ勢ひになれる筈がないのです。

たゞあの喧嘩の一幕を納めた松本奎堂の意氣が面白い、  
「どうじゃ、吉野の方へ遊びに行かんか」

「行つてもよい」  
これで相談が纏まつて、彼は一行の中に加はつて、又も大和國へ逆



戻りをして来たものです。

れども、龍之助の大和國へ逆戻りをして来た縁故がたゞ、これだけであると思ふのも、あまりに淡泊であります。

宿について、風呂を上り夕飯も済んで例の浪士共は、慷慨悲憤の口調で、國事の日是非なるを論じ合つて居たが、龍之助は其れに拘らず外へ出ました。

彼は深い編笠の紐を結びながら櫻井の宿を出て初瀬河原の方へ行く。天はうすら曇つて月は臙のやうだ——彼の假橋を渡つて微行ゆく机龍之助は何處へ行くつもりであるか。

龍之助は三輪へ行くつもりで、初瀬川の橋を渡つて、丁度彼の地藏堂の竹藪のところまで来かゝりました、天にはやはり月がある、地

には露がある、螢は露をたづねて飛ぶ、人は情に引かれて忍ぶ。

龍之助は、今、河原の地藏堂の處まで来た、さうして月影のさすところの行手に二つの人影を認めた。

男と女、どちらとも若い、

そして、どちらとも泣いて居るやうだ日の光のさす處では會へない連中が月影に忍んで泣き明かすのである、無下に驚かすにも當るまいさりとて、そこを通らず露の竹藪を横ぎるのは考へものだ、

『金藏さん……』

泣き伏して居たやうな女が面を上げる、あゝ、その聲は……

龍之助は、立つてしまつた、幸ひそこに地藏堂の蔭がある。

『お豊さん』

若い男の聲、これも聞いたことのあるやうな聲



「金藏さん……わたしは覺悟をしました」

女は覺悟をいたしましたといふ、覺悟とは何をいふ、

龍之助は、この女あるが故に、大和に舞ひ戻つたのではないか、若い男は

「お豊さん、覺悟とは何だい」

「金藏さん、わたしは、もう諦めてしまひました、わたしの身は、

お前さんに任せてしまひます」

「ナニ、わしに任せる……それは眞實か、お前は、わしと一緒に逃げて呉れるか……」

歡ばしさに若い男の萎れた五體は剋ね起きて、女の肩へ手をかけて

「よく言つて、呉れた、それは嘘ではあるまいな」

「とても、期うした身體でございませう、その代り金藏さん、決して

外の人を怨んで下さるな……」

「さう定まれば……お前さんさへ、その氣なら何で人を怨まう、あ

ゝ嬉しい、わしの願ひが叶つた……こんな嬉しいことはない、お豊

さん、これから直ぐに紀州へ逃げませう、あのさつき話した通り、

紀州の龍神といふところへ逃げませう、そこにはわしの親達が温泉

宿をやつて居る……あゝ嬉しい」

龍之助のこゝへ來かゝる事は遅かつた。

最前からの始末を、よく聞いて居たならば、お豊の覺悟をしたと

いふわけも、金藏の嬉しいがるわけも、すつかりわかるのであるが、

これだけ聞いたのでは聞かない方がよかつた。

何だ！輕薄な女

もう自分の事は、すつかり忘れてしまつて、こゝでは別の若い男と



出會つて、身を任せる——言句は絶え果た……男一匹がこの女の爲めに散々に翻弄されて居たのだ、人を斬ることの平氣な龍之助は順序として、こゝで、この二人を並べて置いて斬るであらう——けれども龍之助は刀の柄へは手もかけないし齒齧みをして居る容子もない。

昔は、この女がまた別の男と心中の相談をして遺書を書いて居るところを、よく知り抜いて居ながら、助けやうともしなかつた、今は同じ女が仇し男に身を任せると誓ひを立てたのを聞いて、やはり其の儘で置く龍之助の氣が知れない、

「お豊さん、お前は一旦死んだ體、わしも一旦地獄を見て來た體、生れ更り同志が斯うして一緒になるのも三輪の神様の御引合せだね」  
金藏は斯う云ひながら、お豊の手をとつて、その着物の塵を拂つて

やつたり帯の結び目を直してやつたり、お豊はそれを金藏のする通りにさせて、さうして二人は靜かに竹藪の彼方へ並んで行く。

龍之助は、地藏堂の蔭に立つたなりで、追ひかけやうとも何ともしませんでした。



# 大菩薩峠

三巻の終り

# 大菩薩峠

(龍神の巻)

中里介山著

天誅組が、いよく勃發したのは、その年の八月の事でありました。十七日には大和五條の代官鈴木源内を斬つて血祭りにし、その廿八日は、いよく總勢五百餘人で同國高取の城を攻めた日、その翌日十津川へ退いて、都合二千餘人で立て籠つた時の勢は大に振つたもので、この分ならば都へ攻め上り、君を助けて幕府を倒すこと近きにありと勇み立ち、よく戦ひもしたけれど、紀州、藤堂、彦根、郡山、四藩の大兵を引き受けて見て、力が足りないのは是非もない事でした。



侍従中山忠光は浪花へ逃げ、松本奎堂、藤本鐵石、吉村寅太郎等の勇士は、或は戦死し、或は自殺して、義烈の名をのみ留めた——津川亂の一擧は近世勤王史の花といふべく、詳しく書けば、此處にまた一つの物語を見出されやうけれども、それはこゝに必要を認めず。いよゝ、これ等の一味の者が散々になつて、或者は伊勢路へ或者は紀州領へ、或者は大阪方面を指して、様々に妻を換えて逃げ出した後のことであります。

鷺家口の戦ひから落ち延びた十一人の浪士が、木にも草にも心を置いて風屋村といふ處へさしかゝつて

「あゝ、水が飲みたい」

「水が欲しい」

村とはいふものゝ、こゝは十津川郷の真中で名にし負ふ山又山の

です。十津川の沿岸を傳うて行けば何の事はないのですけれども、四藩の討手が、殘黨一人も洩らすまじと、夜となく日となく草の根を分けて居る際ですから、それは出来ませんでした。

大日ヶ嶽へ連らなる山々を踏みわけて、木の繁みを潜り／＼歩いて行くのだから、水にも遠くなる、水、水といふけれども、木苺一株を見つげ出してさへ、十一人の眼の色が變る位ですから其の腹のこたへは思ひやらるゝのです

「川岸まで戻つて見やうか」

眼と眼を見合せて慘澹たる面の色。

「それは廢せ、最前鐵砲の音が聞えた、拙者の考へでは、これをつと向ふへ横に切つて、紀州の日高郡を目ざすが無事じやと思ふ」

「道程は……」



「風屋——小森——平松——三本杉と行つて紀州日高郡の龍神へ凡そ十三里」

「その間の兵糧は……」

「さあ、それが……」

一同は口を噤んで足が動かない。

「各々方、あれを見られよ、煙が棚引いて居る」

沈んだ聲で、後から言ひ出したのは、あの時以來、何をして居たか兎も角、こゝまで傷一つ受けずに來た机龍之助でした。

翠微の間に一抹の煙がある——煙の下にはきつと火がある、火の側には人があるべきものに定つて居ます

「成程、煙が立つ、拙者が容子を見て來やう」

村本伊兵衛といふのが出かける。

「よし、我輩も行かう」

荷田重吉がいふ、村本と荷田は連れ立つて、その煙の方へ行つて見ます。あとの九人は、木の根と岩角とに腰をかけて、その斥候を待つて居ます

「諸君仕合せよし」

村本と荷田は欣々として歸つて來て

「山小屋がある、その中には獵師と見えるのが、檣に火を焚いて、何やら獸の肉を煮て居る」

「ナニ、獸の肉を」

肉と聞いて旨さうな唾が口の中から迸しるやうであつた。

「敵の間者ではないか」

「いや、さうではないらしい、慥に生えぬきの獵師と見受けた」



「推しかける」

「行つて見ろ」

村本と荷田は案内する。九人は其れに伴いて行つて見ると、山腹のやゝ平かな處を程よく、こなして其處に、かなり大きな掘立小屋があります

「頼む……」

「うあ……」

中で妙な調子の返事がする、面を出したのは正に獵師に違ひない、すつと前に、はじめて三輪の藍玉屋の不良息子の金藏に鐵砲を教へた惣太でありました。

惣太は面を出して見ると、都合十一人、筒袖に野袴をつけたのや、籠手脇當に小袴や、旅人風に糸縷を負つたのや、百姓の蓑笠をつけ

たのや、手創を布で捲いたのや、何れも劇しい戦ひと餓とにやつれた物凄い一團の人でしたから。

「やあ、お前様方は何だ」

「驚くことはない、これから紀州の方へ通る者だが道に迷ふた、暫らく休息させて貰ひたい」

「へえ、宜しうございます、こんな狭苦しい處でございます」

惣太は、杉板を三枚合せて綴つた戸をあけて、中へ一行を招じ入たが、氣味の悪いことは夥しい

「お前様方は、あの天誅組のお方様でございませうか」

「何でも宜しい、そこを締めろ」

「へい〜」

「さあ、獵師、何か食うものはないか」



「別に何もごさいません、何しろ、この通りの山小屋でございませうからな」

「それは何だ」

「これは猪でございます」

「猪！それは至極宜しい、その猪を賣つて呉れんか」

「お賣り申しても宜しうございます」

「よし／＼、それでは買はう、鍋も其のまゝにして、味噌か醤油もあるであらうな」

「エ、只今出して上げます」

思はぬ處で意外の御馳走。一行は爐の周圍をかこんで小舎一ぱいに擴がつて

「猪の肉とは有難い——獵師、もつと大きな鍋はないか」

「へえ、此方にございます」

惣太は、いま爐にかけてあつたのより、やゝ大きい三升焚き位の鍋を押し入れの中から引ぱり出して、それから上り口へ寝かして置いた猪の股のあたりの肉を切りにかゝります

「大きな奴だな、この邊には、こんなのが澤山居るか」

「へえ、大分居るにや居ますがね、近頃は戦争で鐵砲の音が、やかましいものですから、皆んな紀州筋へ逃げ込んで、やつと五日もかゝつて、此奴を一つ仕止めたのでございます」

「さうか、何しても有難い、代はいくらでも取らせるぞ、早く料理をしてくれ」

「では、斯うして丸切りにして、鍋の中へぶち込んで、ぐづ／＼煮立て、進ませませう」



「それが宜からう〜」

惣太はよく働いて猪の肉を煮てやります。氣味が悪くて堪まらない  
けれども、愚圖々々云へば、どんな目に逢ふか知れたものでないか  
ら、神妙に言はれる通りに世話をして居ると、浪士等は寝たり起き  
たりして肉の煮えるのを待ち構えて居ます

「おい〜、獵師、黙つて居ては可かんぞ、こゝに有難いものがある」

磯崎といふ浪士が、寝ころんで居た自分の枕許で見つけ出したのが  
貧乏徳利であります

「やあ、それを見つければ堪りませんな」

「何だ、酒か」

それだけは隠して置きたかつた、惣太が今猪の肉を煮て居たのは、

實は取つて置きの其の濁酒を一ぱいやりたかつたからであります。  
肉の方は、いくらでも御用に立てるが、酒の方はかけ換えがないか  
ら其れを見つげ出された惣太は苦ひ面をしました。

「うむ、獵師、人が悪いぞ、これを隠して一人でこつそり飲まうな  
ぞは不届きだ……一升は儘と認めた、茶碗を出せ、さあ各々、甘露  
々々」

肉の煮える間、一升の濁酒は十一人の口を潤はして居る

それを傍で見て居る惣太の面色はない——惣太が、こんな危ない時  
世に、山奥へわけ入つて猛獸を追ひ廻して居るのも、この一升が生  
命なのであります。

それを見す〜、人に飲まれて自分は指を咬えながら、料理方を承  
はつて居る辛さ口惜さといふものは容易なものではないのでした。